日本よ、今、闘論！倒論！討論！２０２５第８９９回

R7/3/5

トランプ革命とエネルギー大転換！日本は生き残れるのか？

パネリスト：

石井孝明（ジャーナリスト）

川口マーン惠美（作家）※スカイプ出演

杉山大志（キヤノングローバル戦略研究所 研究主幹）

竹村公太郎（日本水フォーラム代表理事・事務局長）

平井宏治（経済安全保障アナリスト・株式会社アシスト）

藤和彦（経済産業研究所コンサルティング・フェロー）

司会：水島総

＊＊＊＊＊＊

水島「皆さん、こんばんは」

一同「(礼)」

水島「闘論！倒論！討論！２０２５第８９９回目の討論となります。あと一回で９００回ということになります。皆さんのお陰でございます。有難うございます。今日は『トランプ革命とエネルギー大転換！日本は生き残れるのか？』と。こういったエネルギー安保っていうのをメインで考えながら議論してみたいと思います。ただ今日も午前中、日本時間ですけども、トランプ大統領が合同議会の中で演説をしたということで、大分、色んな形の転換が宣言されて来たということであります。

まぁ、はっきり言うと、ＬＧＢＴとか脱炭素といった問題に対してＤＥＩとか、こういう言い方ですけど、こういったものを否定的にと言うか否定的と言うよりも、もう辞めると、うちは、しないんだというような形でやりました。それから、つい昨日、一昨日ですか、まぁ、日本時間の問題ですけど、アメリカによるウクライナに対する軍事援助を一時停止ということで、ゼレンスキー大統領の態度が一日毎に変わるというね、まぁ、戦争の終わりは遥かVery Very Far　Wayっていうね、Farawayっていうのかな」

藤「そうですね」

水島「こういったことから、急にトランプ大統領の強い指導の下に和平をしたいと。そういう意味で、小国の悲しみというのはあるかも分からないけど、あまりにも露骨で、じゃあ、何故、あぁいうことをしたんだとか色んな事を言われる訳であります。厳しい世界が今、本当に始まっている。うちの先生と言うか首相は、どっちの側にも付かないという（笑)。それを聞いたトランプはどう思っただろうか。或いはゼレンスキーとか英仏はどう思っただろうかと考えると、なんだ、いい加減な奴だと、やっぱりビンタの一つも張れば、いくらでも動くって思われちゃうというようなこともあるかも分かりません。

皆さんの色々なお考えがあると思います。ただ明らかに流れは、こういった形のトランプ主導の世界に替わりつつある。取り分け、とにかく英仏を代表とする連合とアメリカとロシアですね。こういう対立をグローバリズム対反グローバリズムみたいな形の構図でも、また説明できるかも分かりませんが、本当に世界は今、急速に変わっています。

ある新聞は２４時間で１０項目、変えたと。演説の中でも４年分を２週間でやったと、トランプが自慢しているということで、メディアも民主党、野党もとてもついていけなくなっているという状態であります。ただ、最近、新聞や一般のメディが主張、指摘し始めているのは、実は周到な準備をされていたんだと。思い付きでバンバンやっているんじゃないということを、やっぱりやりました。それで昨日、パナマの香港企業からブラックロックが…」

藤「あぁ、そうでした。売却」

水島「全部、売却。買い取ったっていうね、こういうような形で本当にあっと言う間に、この数週間で色んな事が起きています」

藤「そうですね」

水島「まぁ、そういう中で我々の国が生き残るのに、これで本当にいいのかと。どっちの側でもないなんて、のんびり言っていて本当にいいのかということも含めて、今日、皆さんにお話を伺いたいと思います。では、まず、ご出席の皆さんをご紹介していきます。日本水フォーラム代表理事、事務局長の竹村公太郎さんです。宜しくお願いします」

竹村「竹村です。宜しく」

水島「経済産業研究所コンサルティング・フェロー、藤和彦さんです。宜しくお願いします」

藤「宜しくお願いします」

水島「経済安全保障アナリスト、株式会社アシストの平井宏冶さんです。宜しくお願いします」

平井「はい。宜しくお願いします」

水島「キヤノングローバル戦略研究所 研究主幹、杉山大志さんです。宜しくお願いします」

杉山「宜しくお願いします」

水島「ジャーナリストの石井孝明さんです。宜しくお願いします」

石井「宜しくお願いします」

水島「今日は、スカイプの出演です。ドイツにお帰りになったばかりの作家の川口マーン恵美さんです。川口さん、宜しくお願いします」

川口「宜しくお願いします」

水島「はい。ドイツの状況も聞きたいと思います。今日は、トランプ革命の進む中でエネルギーの安全保障は、世界的な石油とか色んな天然ガスも含めて、原子力、或いは水力、太陽光発電、風力と色んなものがありますけど、エネルギーの方向っていうのは、どういう形に向っていくのか、少なくともトランプ政権は脱炭素ということを言い出している。掘って、掘って、掘りまくるというね（笑）」

一同「（笑）」

水島「石炭を、と言い出しているっていう、全く炭素ゼロとか、こういった流れとは１８０度、転換しようとしている。こういう中で、我々はどう生きていくかなんですけど、どうも予算を見ると予算編成とかを見ると、日本の予算の流れは、あまり変わっていないっていうね」

藤「あぁ、全然、変わってないですね」

水島「変わってないですよね」

藤「（頷く）」

水島「というようなことがあります。皆さん、まぁ、トランプ革命も含めて演説もありました。相対的な感想を、どんな感じで今、政治を受け止めているのか、皆さんの感想を伺ってみたいと思います。竹村さんから、お願いします」

竹村「まぁ、私はドメスティックな人間なので、国際的なことは解らないんですけれども、トランプさんの話を聞いていると本当に面白いですね。というのは、解り易い、解り易いです。ディールする、あれを言い換えると交渉しようということですよね。交渉、交

渉っていうのは利害の取引で、利害の取引の無い交渉なんかあり得ないので」

水島「うん」

竹村「イデオロギーを押し付けるのは一方的な権力、または力の関係ですけど、ディールしようということは物凄く解り易い。今回のトランプさんの当選直前からの動きを見ていると、こんなに解り易かったのかと。ましてや、この間のウクライナの大統領とのやり取りを見て、こんなのを見られて良かったなと。またヨーロッパだとか日本がガラガラと変わっていくというのは、トランプさんが出て来て非常に面白いなぁって言うか、見ていて楽しいですね」

一同「(笑)」

竹村「こんな楽しいことは無いと思います」

水島「はい。有難うございます。ああいう国際会議の、戦争と平和の首脳会議が目の前で展開しちゃいましたからね。そういう意味では解り易いって言えば解り易いんですね。はい、有難うございます。では、藤さん、お願いします」

藤「はい。前回もお話ししましたけど、トランプさんの外交面、安全保障」

水島「はい」

藤「特にウクライナへのアプローチは極めて正しいと思っていますので、非常にいいかなぁと思っています。元々アメリカなんていうのは伝統的には、そのモンロー主義と言うか、南北アメリカ大陸を守ればいいっていう話であって、欧州の話は出来るだけ、もう、あまり関与したくないという伝統的な外交に戻るっていうことで、そうじゃない外交が、少なくともバイデン政権っていうのは米ソ冷戦の尻尾を未だ引きずったどうしようもない外交をやったんですが、それをスパッと諦めたという意味では非常に良かったと思います」

水島「なるほど」

藤「まぁ、ゼレンスキーも３年間、あれだけアメリカ中心にちやほやされたので、例えば、あぁいう殆ど場違いな発言をするっていうのは、しょうがないなって思いますけど、世界の人があれを見たことによって、あぁ、世界は多分、変わるんだなと。そういう意味で本当の意味での外交に戻っていくんだろうなっていうことを認識させたっていう意味では、アメリカでも半分ぐらいの人間が未だ相変わらずバイデン政権の外交を支持している中にあって、あそこまで、はっきり言ったっていうのは、やっぱりトランプさんの胆力というのを非常によく感じます」

水島「はい」

藤「それから二つ目に、今日の演説の中でも温暖化問題はグリーン詐欺だと、また言いましたから」

水島「はい」

藤「まぁ、あとで杉山さんの方から詳しくご説明があると思いますけど、今回、パリ協定から抜けたこと以上に、そういう温暖化の利権で飯食っていた研究者に対して、今、締め

付けを始めていまして…」

水島「まぁ、そうですね」

藤「それで一例を挙げると、アメリカの海洋大気局、ＮＯＡＡ（National Oceanic and Atmospheric Administration）って言うんですか」

水島「うん」

藤「６００人、研究者をクビ切って、しかも２０２９年に、またＩＰＣＣ(Intergovernmental Panel on Climate Change)の報告書が出るんですけど、その準備会合が先月の末に中国の杭州でやる予定だったんですけど、トランプ政権がアメリカの研究者は一切、この問題に協力するなっていう通達が出て、アメリカ人研究者は誰も出席しなかったということは、その上では相当、本腰を入れてやっているっていう意味では、私の親元の経産省は、未だ相変わらずグリーン、グリーンと言っているんですけど」

水島「うん、そうだねぇ」

藤「私がグリーンなんてグリーン詐欺だと思っていますので、そういう意味では、非常に正しい事をやっていると」

水島「はい」

藤「まぁ、最後ですけど、水島社長がおっしゃったように、トランプさんがちょっと拙速にやり過ぎているきらいがあって、やっぱりここに来てアメリカ経済は相当、悪くなってきましたね」

水島「うん」

藤「実は、そこが心配で」

水島「うん」

藤「結局、ゴリゴリのＭＡＧＡ主義者を今、非常に喝采するんですけど、やっぱりトランプさんの支持者の内の過半は、そのインフレ対策を何とかしてくれよと」

水島「うん」

藤「これに対して、殆ど落第点がついていますし、それから、あと、連邦職員のリストラも相当、マイナスですし、唯一ギリギリ５０％が不法移民対策で、第１四半期が多分、アメリカのＧＤＰはマイナスになりますから、第２四半期も多分、良くないでしょうから、リセッションっていうことになった時に、一気にトランプさんがやっておられるのが国内的には、かなりモメンタムを失ってしまうんじゃないか。

その時にトランプ政権が、どういう形でこの難局を切り開いていくのかなっていうところが今、見どころかなと思っています。以上です」

水島「そうですね。はい、有難うございます。では平井さん、お願いします」

平井「はい。トランプさんの登場で、今日のお題であるエネルギーですかね、これで言うと、元々再エネっていうのが、まぁ、ＥＵがブリュッセル効果って言われるやつを狙って金儲けで始めたことな訳です。環境じゃないんです。これは彼らのビジネスですよね。金

儲けです」

水島「うん、なるほどね」

平井「結局、排出権市場とかね、あぁいうものをつくって、そこの市場で取引して金を取ろうということを企んでいて、その為に彼らにとって地球が温暖化していなきゃ困るんです。温暖化しているかしていないかは別にして、それでやっているようなものをようやくトランプさんが登場して、これは違うだろうということを始めたというのを見ていて非常に痛快です」

水島「うん、そうですね」

平井「翻って我が国はどうなっているかと言うと、相変わらず再エネ賦課金に庶民は苦しめられて、結局、何かって言うと、何度も言っていますけど、２０１２年にメガソーラーを始めた人はキロワットアワー４０円で買って貰っている訳ですよ。ところが発電コストって大体１０円ぐらいですね。だから、その差額の３０円っていうのが丸儲けになる訳です。

それをどんどん進めたいから、政治家のパーティ券を買ったりとか政治献金したりして、それをやり過ぎたのが逮捕された秋本真利議員ですよ。こんなことを未だに改めようとしない自民党って何なのというところに行くんですけど、結局、家業化した議員の集まりに過ぎなくて、そこは国政選挙当選互助団体に過ぎなくて、プロレスには申し訳ないんだけど、国会でプロレスごっこをやっていると。何かあったら保守的な人がうわぁ～っといって保守の票を集めて、そして自分達の再選の為に使っていると。だから僕はガス抜き議員と言っている訳ですよ。

それで、その正体は何かって言ったら、もう税を搾り上げて、税をどんどん増やして、この前もガソリンの２５．１円が無くなりましたよね、あれをやめようっていうのが。こういうのを、とにかく庶民に重税をして、そして吸い上げるだけ吸い上げて、そして、それが利権関係者を経由して還元すると。利権関係者にお金が落ちる。そして、その見返りに票を貰う訳ですよ」

水島「うん」

平井「だから裏金、裏金って言って、何故、表に出ないかって言うと、僕は、あっちこっちで言っているんです。これを地方議員に配っていて、お前に３００票をあげるからと。お前には、これをやるから５００票なということをやっているからですよ。僕は、ずぅ～っと、そういうことをネット番組で、まぁ、何故、こんなことを言っているかって言うと、名前は言いませんけど、何回か、ある自民党議員の選挙を手伝って、その実態を見ているから知っているので言っているんです。

だから名前は挙げませんけどね、だけど、それで私は色々と発信している訳ですけど、自民党からのクレームはひとつも無いですよ」

水島「怖いんだね」

平井「怖いんです。じゃあ、あの先生はどうなんですかって言われちゃうと（笑）、まぁ、こういうような再エネがそうです。結局、さっき言った秋本真利さんが逮捕された馬ロンダリングだとか色々言われましたけども、そういうようなことをやっていて、実は環境の

為じゃなくて自分の利権の為にやっていると。

それでねぇ、アメリカのトランプさんの登場で、先程、水島社長がおっしゃったように掘って、掘って、掘りまくれというね、石油とか液化天然ガスとか色々なものをこれから売ろうとしてきます。これについては、また、あとでお話ししますけど、私は、そういうものを買って来て日本の優秀な火力発電の技術を使って、どんどん火力発電所を造って、そして、あれを減らしていくってことは大事なんです。

そして今迄、金融の世界では、まぁ、アメリカもそうですけれど、アメリカで今、顕著になっている訳ですけど、銀行が２０５０年だったかな、炭素をゼロにする為にそういうものに協力しない、逆行する様なものには融資をしないっていう協定を作っていた訳ですよ。トランプさんの当選で、それから、どんどん抜け始めている。そして、もう一つ、言えることは、日本では三井住友ファイナンシャルグループが離脱したんですね」

水島「おぉ」

平井「えぇ。だから、そっちに行っていると。野村ホールディングス、野村證券さんも、そっちの方へ検討しているということで、今迄、例えば日本の優秀な火力発電所とか、こういった技術に融資をしなかった流れが変わって来るよねと。これは、このチャンスを捕まえて電気代を下げて、そして脱中国を推進して日本で物造りを復活すると。こういうことをやっていくきっかけになってくれるといいなぁと思って見ておりました」

水島「そうですねぇ」

平井「はい」

水島「平井さんは、特に北海道とかね」

平井「はい」

水島「色んな所を周ってね」

平井「えぇ」

水島「酷い状態をね（失笑）」

平井「酷いです」

水島「レポートしてくれたことがありましたから」

平井「えぇ」

水島「うん。現場に行くと、それは本当に判りますよね」

平井「えぇ」

水島「はい」

平井「やはり小野寺さんが必死にチャンネル桜北海道とか色んな媒体、文化人とかを使って発信していますけれど、北海道は本当に酷い状態だと思います」

水島「うん、そうですね」

平井「えぇ」

水島「杉山さん、太陽光パネルは普通、平均３割稼働っておっしゃったじゃないですか。それと、もうひとつ、今、お話を伺いますけど、東京都のあの知事は新規の住宅に全部、太陽光パネルって馬鹿じゃないのっていう感じがするけど、家ぐらい好きなように造らせろよっていう感じだけど、これも含めて、このトランプの政策転換はどうですか」

杉山「はい。今、平井さんが凄く上手く纏めたので、話し難いんですけどね（笑）」

平井「い～え～（笑）」

杉山「一応、資料を準備したので、社長には前にお見せしたものですけど、そうじゃない方も居らっしゃると思うので」

藤「いえいえ、言って下さいよ」

水島「いや、ダブっていても結構ですから」

杉山「まずトランプ政権はエネルギーを物凄く重視しているっていうことが、まず、最初ですね」

水島「そうですね」

杉山「これは優先事項っていうものがホワイトハウス・ホームページにあるんですけど、この僅か５行に全部を要約しています」

水島「あぁ」

杉山「そのうちの１行が、アメリカのエネルギー優位性を解き放つと書いてある訳ですね。このエネルギー優位性っていうのは何かって言うと、元々の言葉はEnergy Dominanceと言うんですけれども、私はエネルギー優勢って訳すのがいいと思っているんです。とにかくエネルギーを大量に、安価に供給して、それで敵に対して優位に立つと。ここは敵って、はっきりは言わないけど、まぁ、明らかに中国を念頭に置いている訳ですね。

この優先事項っていうところの、続きを読むというのをポチっとやると４項目が出て来るんですけど、その内、一番、行数を割いているのが、やっぱりエネルギーですね。何を言っているかっていうと、気候過激主義に基づくバイデンの政策を廃止すると」

一同「(笑)」

杉山「Climate Extremismを廃すると、最初に書いてあるんですね。まぁ、アメリカには資源がいっぱいあるんだけど、色々規制されて開発が阻害されていたから、その規制を無くすっていうことを、まず言っていると。

それから２点目ですけど、あの電気自動車の導入だとか、あと省エネルギーの規制で細かいのがあって、シャワーから、あまりお湯が出ないようにする規制とか」

水島「はい、ありましたね」

杉山「そういうのをやめるんだと。消費者が自由に選択できるようにしようっていうことですね。それから、次ですけど、エネルギー緊急事態っていうのを宣言すると」

水島「うん」

杉山「これは何が緊急事態かと言うと、生活費がかかっていますというのと、あとアメリカのエネルギーのインフラって、実は今、結構、ガタガタになっていて、その一方でＡＩのデータセンターとかで向こう７年ぐらいで日本丸々一個分ぐらいの電力需要が追加されるっていう見通しがあって、それに対処する為に、とにかく発電所もどんどん造らなきゃいかんということですね。

この緊急事態宣言というのは、これを宣言すると行政府の権限っていうのが強くなって、色んな規制というものは一時停止できるという効果があると。これで何処まで本当に進むかは、これからっていうところがあるんですけど、こういうことも言っていると。

それから洋上風力発電ですね。これに関しては、国が海の土地をリースしないと建設できない訳ですけど、そのリースを止めるって言っているんだから、とにかく、洋上風力発電自体をしないと」

水島「うん、うん」

杉山「この理由はコストが高いですよ、電気代が上がりますよっていうこと、あとは環境破壊ですよねっていうことをあげていると。それからパリ気候協定からは離脱って、この辺までは全部、就任１日目に、はっきり言っていて」

水島「そうでしたね」

杉山「これは、就任演説の方でも、やっぱりエネルギー源を話していて、これ、今のと被るので、ポイントだけにしますけど、アメリカを製造業の国に戻すんだと」

水島「うん」

杉山「この時に、アメリカが、特に特徴があるのが、とにかく資源が豊富にある事なので、Drill Baby, Drill って書いていますけど、掘って、掘って、掘りまくれって訳されていますが、それをやるんだということですね。この辺は、もう第一次トランプ政権でもエネルギー・ドミナンスっていうのはキーワードだったし、それから選挙期間中もエネルギー・ドミナンスって、ずっと言っていてですね。さっき社長がおっしゃったように、周到に準備していたっていう話があるんですけどね」

水島「はい」

杉山「エネルギー政策に関しては、本当にワシントンのシンクタンクとかも周到に準備していて」

水島「なるほど」

杉山「予想された通りのことが出て来ているので、実は、何のサプライズも無いと」

水島「無い」

杉山「トランプだけがこれを言っているという訳ではなくて、エネルギー・ドミナンスというのは共和党の総意だっていうことが大事で、例えば、このマルコ・ルビオ国務長官ですね」

水島「うん」

杉山「２０２２年にＦＯＸニュースの番組に出て『愚かなグリーン・ニューディールをやめろ』と、『Silly Green New Deal をやめろ』と、はっきり言っている訳ですね。これはＦＯＸニュース全国ネットで結構、大きいですから、まぁ、日本風に言えば、地上波に自民党の国会議員が出て来て、愚かな脱炭素をやめろと言っているようなもんで、中々、そういう風景は日本では出て来ないんですけど（苦笑）」

一同「(笑)」

水島「うん」

杉山「この時、何故、彼が愚かなグリーン・ニューディールと言っていたかって言うと、ウクライナで戦争が勃発したんですけど、その時にロシアの資金源は石油とガスでしょと。何故、それをヨーロッパが一生懸命、買って、彼らに軍資金を与えているんだと」

水島「うん」

杉山「アメリカの石油とガスを買えばいいはずだったと」

水島「うん」

杉山「あとは、アメリカが石油とガスをふんだんに供給していれば、世界的に石油もガスも値段が下がるから、そしたら、それが一番、ロシアに経済的に効く、まぁ、そういったことを言っていた訳ですね。他の人も、みんな、このエネルギー・ドミナンスっていうことは共通していて、これはトランプの政敵でも、あまり変わらない。マイク・ポンペオとかも、まぁ、彼は全くネオコン的な人ですけどね。だけど、やはり、このエネルギー・ドミナンスが必要だって、この点に関しては本当に、みんな一致している訳ですね。

じゃあ、気候変動はどうなんだって言うと、トランプさんは Scum とか詐欺とかね、四文字言葉を使ったりして、それがトランプさんだけですけど、ただ共和党の人達は、みんな、そんな気候危機なんて存在しないっていうことを、よく知っていると。それは、データをちゃんと知っているからな訳で、これはアメリカの公聴会で、よく出てくるデータですけど、ハリケーンの数は過去４０年ぐらい、世界で変わっていませんと」

水島「あぁ、そうですね」

杉山「強いハリケーンの数っていうのも過去４０年ぐらい変わっていませんと。こういうものを見て、よく知っているので、だから気候危機説なんて嘘でしょと。そんな脱炭素を２０５０年迄にしなきゃいけないだとか、その為に安全保障や経済、莫大なコストをかけなきゃいけないとか、そんなことは、みんな、間違いだと。これも共和党の総意ですね。

さっき、銀行がネットゼロ・アライアンスっていうのから逃げ出しているっていう話がありましたけど、まぁ、所謂、環境にやさしい投資ですね。ＥＳＧ投資っていうのも、共和党の人達は、もう、これは絶対に駄目だと」

水島「うん」

杉山「これは、もうトランプが当選する以前から言っていて、昨年の夏ですね、アメリカの下院の司法委員会、まぁ、下院なので共和党主導ですけど、これがＥＳＧ投資っていう

のは気候カルテルだと、反トラスト法違反だと。まぁ、そりゃそうです」

平井「（頷く）」

杉山「みんなで、あいつには金を貸さないようにしようぜということを言う訳で…」

水島「うん、うん」

杉山「その結果、消費者は凄くコストを負わされるっていうことです」

水島「うん」

杉山「これも凄く効いていて、今、主なアメリカの大手銀行、上位６行が、みんな、ＣＯ２ゼロにするっていうアライアンスから抜けてしまって、日本はどうするつもりなのかなぁと思って見ていたら、さっき、平井さんがおっしゃったように日本でも大手がどんどん、やめ始めているということです」

水島「さっき、聞いたように、政府よりも企業の方が敏感ですね、はい」

平井「（頷く）」

杉山「まぁ、ここに留まっていると、反トラスト法違反だとか言われるとか、アメリカで公の調達案件があった時に入れてくれないと、そういう可能性もあると」

水島「あぁ…ねぇ」

杉山「はい。それから、アメリカは、これから日本に何を求めて来るだろうかっていうことですけど、まず、このマルコ・ルビオって、どういう人かっていうのは国務長官ですが、彼のホームページですね。国務省に彼のプロフィールがあって、ここで凄く誇らしげに書いてあることで真っ先に出て来るのが、ウイグル強制労働防止法を作ったのは彼だと」

藤「なるほど」

杉山「彼は、それで中国製の太陽光パネルで強制労働の疑いあるやつは、みんな、税関で跳ね返すっていう格好にしていて」

水島「そうでしたね、はい」

杉山「しかもベトナムとかを迂回して脱法して入って来るやつもあるので、それも止めるということを一生懸命やって来た人ですよ。彼が今、日本が何をやっているかっていうのを知ったら面白いだろうなと思っていて」

一同「（笑）」

杉山「つまり、日本はアメリカの税関で跳ね返されるやつをバンバン輸入して、バンバン導入して（苦笑）」

水島「そうですよね」

杉山「何なら義務化までしている東京都みたいな所もある訳で」

水島「いや、ほんと、そうですよ」

杉山「多分、未だよく知らないんじゃないかと思うんですけどね。この番組をご覧かどうか判らんですけど（笑）」

平井「今度、みんなでワシントンに言いに行きましょうか（笑）」

杉山「早目に知って…」

平井「言いつけに行きましょう（笑）」

杉山「言われる前に日本でやめた方がいいっていうのは当然、思うところですね。それからヴァンスですね。この間のゼレンスキー対トランプの大喧嘩の時に（笑）、彼も一躍有名になりましたけども、彼が今年のミュンヘンの安全保障会議で言っていたのは、ヨーロッパの敵はロシアでも中国でもなくて、お前達自身、中が腐っとるということを言って（笑）」

水島「ヴァンスが言いましたね。はい」

杉山「でも昨年、彼が何を言っていたか、同じミュンヘンの安全保障会議で言っていたことは、ドイツのエネルギー政策を批判していたんですよね。ドイツのエネルギー政策っていうのは何だと。原子力を否定し、石炭火力を否定し、太陽風力とか言ったけど、結局、ロシアのガスを買うしかなくなって、しかも電気代が物凄く上がっていると。それのせいで産業が、どんどん崩壊しているでしょうと」

水島「うん」

杉山「そんなことだから、軍隊用の装備品もろくに造れないでしょと」

水島「うん」

杉山「そういう愚かな脱工業化はやめろと。Deindustrialization をやめろということを凄くはっきり言っていたんですよね。これも多分、ヴァンスが、日本は何をやっているか未だよく知らないんじゃないか」

一同「(笑)」

杉山「日本もグリーン・トランスフォーメーションをやって電気代がバンバン上がって、ですね」

水島「うん」

杉山「脱工業化の真っ最中だと知ったら、多分、同じことを言うんじゃないのかと」

水島「う～ん」

藤「早く言って欲しいですね」

平井「それ（笑）」

一同「(笑)」

水島「ほんと、そうですね」

杉山「だから、これも言われる前に日本は愚かなことをやめればいいです。それで、また

別の人ですけど、これは、エルブリッジ・コルビー（Elbridge Colby）という国防総省のナンバー３ですけど、軍事戦略に関しては彼が中心になってやると。彼のインタビューの本があるんですけど、一番、大きく言っているのは、この中国は脅威ですよねと」

水島「うん」

杉山「それに対しては、日本を始め沢山の国で反覇権連合を創らなきゃいかんと。日本はその中心だから防衛費も増やさなきゃいけないし、核共有も検討しなきゃいけないっていうことを言っていて、もう一つ、面白いことを言っているのが日本の工業力ですね。これを使って兵器も生産すべきだと。アメリカは産業が、もう空洞化してしまって、船だったら製造能力は中国の二百分の一しかないと」

水島「うん」

杉山「その他にも日本は、とにかく工業力が未だあるから、それを一緒にやってくれと」

水島「うん」

杉山「そうしないと今、アメリカ単独だと、いつになったら装備増強出来るか分からないと。こういうことを言っているんですね。面白いのは、弱い日本というのは決して望んでない訳ですよ。日本は強くなきゃいけないと」

水島「うん」

杉山「その為には製造業も日本はちゃんとなきゃいかんと言っている訳ですよ。これも言われるまでもなく、そうだよなっていうことですけども、じゃあ、日本は何をやっているかという話ですが、この素晴らしい第７次エネルギー基本計画というのが（失笑）２月１８日に閣議決定されまして、２０３５年迄にＣＯ２を６０％減、２０４０年迄にＣＯ２を７３％減という数値目標をつくって、これをパリ協定事務局に提出してしまいました」

水島「う～ん」

杉山「こんなことは本当にやれるはずもないしね、こんなものを目指したら産業なんて、もうガタガタですよ」

水島「本当に愚かなあれだな、これ。うん」

杉山「過去１０年ぐらい日本のＣＯ２って、ずぅっとこの折れ線でお判りのように、一直線に減っているんですよね」

水島「う～ん」

杉山「これを日本政府は On Truck で減っていると言って自慢しているんですけれども、このオントラックで減っている理由って何かと言うと、この簡単に要因分解出来てですね、これは産業空洞化ですね」

水島「あぁ、そうですね」

杉山「産業部門のＣＯ２減の７割以上は産業空洞化です」

水島「う～ん」

杉山「原子力が回ったとか再稼働したとか、再エネが増えたとか省エネやったとかあるんですけど、そんなのは、せいぜい３割ぐらいしかない」

水島「う～ん」

杉山「７割が産業空洞化」

水島「凄いですよねぇ」

杉山「こんなオントラックを延々と続けていたら、もう日本から製造業もゼロになってしまいますと」

水島「うん」

杉山「脱炭素を実現する為に政府がやっているのがグリーン・トランスフォーメーションで、１０年間で１５０兆円の投資を起こすんだとか言っていて、これがＧＤＰの３％。防衛費を２％に増やすっていうのを大騒ぎしている時に、ＧＤＰの３％の投資がこっちには行くと。

これを実現する為に国債を２０兆円、発行して、その償還の為だと言って、排出権を国が売ったり、エネルギーに課徴金をかけたりカーボンプライシングって呼んでいるのをやって、その為の外郭団体を創って特別会計で回すという、まぁ、役人的には１００点満点って言うか（苦笑）」

一同「（笑）」

杉山「そういうものが出来上がっているんだけど…」

水島「あぁ。特別会計ですか。なるほど、う～ん」

杉山「一回、こういう政策をつくっちゃうと、これは無くならない。中々大変。そのエネルギー基本計画って１５０兆円で何やるかって、一番、大きいのは、やっぱり相変わらず再エネな訳ですね」

藤「うん…」

杉山「電力が再エネの割合を４割から５割に増やすと言っていて、２０４０年までに４割から５割、増やすと言っていて、この内の１割は水力発電ですので、要は太陽風力で３～４割にするって言っているんですね」

藤「今の３倍にする訳ですね」

杉山「現状は１割ぐらいですから、それを３倍ないし４倍にすると言っている」

水島「うん」

杉山「だけど、そんなことをやったら電気代はどうなりますかって言うと、２０４０年に電気を供給するのに、どんなやり方があるかっていうのを、これは全部、政府の資料から数字を持って来て並べ替えただけで作った数字はひとつも無いです」

水島「はい」

杉山「一番安いのは既存の原子力や火力発電所を回すこと、それは燃料費だけですから」

水島「うんうん」

杉山「なのに、今、日本政府は既存の火力発電所をどんどん潰したり、使わなくするっていうことを言って、これは愚かしい」

水島「うん」

杉山「それから、これで足りなければ、やっぱり火力発電所や原子力発電所を建てるっていうのが、その次に来て、太陽風力とか、やっぱり高い訳ですよ」

水島「うん」

杉山「何故、これがこんなに高いかって言うと、大量に導入するとなると、発電した時には発電し過ぎで発電しない時には何も無いので、バッテリーに貯めるとかしなきゃならなくなって、それをやり出すとべらぼうにコストが高くなると。これは政府の数字でちゃんとある訳ですよね。非常に高いっていうのがね。他に政府が推進しているのは、火力は火力でも出て来たＣＯ２を地中に埋めるＣＣＳとか、それからアンモニア発電とか、これは水素からアンモニア作って、それを火力発電所で回すと。これもべらぼうに高い訳ですよ」

水島「うん」

杉山「これは未だ存在しないものですから、ＣＣＳもアンモニアも世界中の何処でも本格的にやっていなくて、だから机上の計算なので、実際にやれば、もっと高くなるんだろうと思うんですけど、日本政府が今、やっているのは、この安いのをやらないで、原子力の再稼働だけはやるって言っていますけどね」

水島「うん」

杉山「だけど、こっちの再エネとかアンモニア発電とかべらぼうに高いのをやるって言っている訳。因みにアメリカのガス火力発電所っていうのは新設でも６円ぐらいですから、この辺（苦笑）で、アメリカは、これをバンバンやりまくるって言っている時に日本は、このべらぼうに高いのをやりまくると言っている訳で…」

藤「シェールガス安いもんねぇ」

水島「工場なんか造れませんね」

杉山「一体、誰がその日本に投資をするのかっていうことですよ。新疆ウイグルのパネルというのは、こういう所で造っていますよっていうのは前もお見せしたと思いますけど、航空写真でね、太陽光パネルの工場があるんですけど、パネルを造る為にシリコンを精製しなきゃいけないので電気が沢山、要るんですけど、どうしているかって言うと隣に火力発電所があってベルトコンベヤーが伸びていて、それで露天掘りの炭鉱があって、これ、何のことは無い。この石炭で発電してパネルを作るって、その為に全部、この事業をやった訳ですよね。

日本は、これを買って来てＣＯ２が無いパネルですと言って喜んで屋根に乗っけていると。アメリカとどうしたらいいかっていうことですけど、さっき平井先生がおっしゃった

ことと殆ど一緒ですけど、私は、もうエネルギー・ドミナンスとアメリカが言っている、このコンセプトに日本も乗っかればいいと」

水島「そうですねぇ」

平井「（頷く）」

杉山「そのアメリカは化石燃料、石油、ガス、石炭、掘りまくりますと。重要鉱物も掘りまくりますよと言っている」

水島「うん」

杉山「そうしたら、日本もそこに一緒に投資できるものは投資して、契約を長期的に結ぶなら結んで輸入すればいいと。まぁ、これは端的にトランプっぽく言うと、トランプから石油を買うと書いたんですけど（笑）、別に石油である必要も無いので、アラスカのガスがいいのか、その辺は本当に何がいいのかっていうのは、それは交渉ですけども、日本は元々資源権益って海外で獲得する事に凄く苦労してきたんでね、アメリカでも、その上流に資源に投資するっていうのは大いにあり得る話だろうと。

それは安全保障の為には勿論、良くて、今、石油は９割以上、中東から買っていますけども、アメリカから買うというのは多様化するという意味もあるし、あと、いざという時にアメリカの船だったら中国も攻撃を躊躇します」

水島「それは中々し難いですよね」

杉山「それから、なんだったらアメリカが軍艦を付けてでも、日本に送り届けますから、そういう意味での安全保障のメリットも大きい」

水島「なるほどね」

杉山「それから日米だけじゃなくて友好国、特に東南アジアとかは、これからガスの需要とか、あと、電力の需要とか、どんどん伸びて来る訳ですけど、アメリカは勿論、資源を輸出したい、だけど日本もプラントを輸出するとか、やればいいと。発電所は勿論ですけど、ＬＮＧの受け入れの設備とか日本の得意技のものは沢山ある。商社もあるしエンジニアリングの会社もある。

これが今、ＣＯ２が出るからといってＧ７諸国は、みんな、化石燃料に関係する事業には政府が投資も融資もしないっていうことをやってきた訳ですけど、もう、それはやめるべきだと。国際開発機関ですね。アジア開銀とか世界銀行も同じ様にして、その化石燃料事業に投入してこなかったんですけども、これも改革してやらせる。これを、アメリカと一緒になって変えていかないといけないと」

水島「うん」

杉山「それから太陽光パネルの輸入禁止は勿論ですけど、あと、気候危機説ですね。これを批判的に検証するっていうのも、アメリカも、そういうプロセスを動かすと思いますけど、日本もやったらいいと。こういうことをやっていくと、トランプさんは貿易収支をやけに気にして、ですね。私は、そんなに貿易収支に注目するのは何か、どうかと思うんだけど、でも貿易収支の均衡の方向には向くし、それから日本の製造業も強くなる。防衛装備も造れるようになる。あと、こういうことをやっていると、やはりパリ協定って凄く邪

魔になりますので、日本は離脱すべきだろうと思っていると」

水島「うん」

杉山「パリ協定から日本が離脱したら、確実にもうお終いですけど」

水島「ねぇ。本当にすればいいのに」

杉山「でも、この間、目標を提出してしまったので（苦笑）」

一同「（苦笑）」

水島「だからねぇ、本当に…」

藤「生き延びちゃうから」

杉山「だけど本当に生き延びるか分からなくて、今、目標を提出している国って、まだ１０個ぐらいしかないですね。もう期限過ぎたんですけど」

藤「うん。１割も無いもんね。２月中旬ですからね」

杉山「実は、もう、すっかり行き詰っていて、毎年、年末になると国連気候会議ってやる訳ですけど、まぁ、私は、これが一枚で要約出来ていると思っていて、毎年、同じことを言っているんで、最近、先進国側は自然災害が激増したと。ＣＯ２のせいだと。気候危機だと。これは全部、嘘なんですよ」

一同「うん」

杉山「だから２０５０年、ＣＯ２ゼロで、我々もやるからグローバルサウスもやれってお説教を垂れるんだけど、グローバルサウスは全く聞く耳を持たなくて…」

藤「やる元気が無いでしょ（笑）」

杉山「今、災害が激甚化したのか。だったら、お前らが責任をとれと」

水島「うん」

杉山「賠償しろと。防災の為のお金も出せと。先にＣＯ２を出しちゃったのもお前達なんだから、俺達が減らす時に金を寄こせって凄く最もなことを言ってて、年間５兆ドルとか言っていて、昨年の年末のＣＯＰでは大バーゲンして３０００億ドルになったんですけど（笑）、でも３０００千億ドルと言っても４８兆円ですよね。

これを毎年、グローバルサウスに先進国から払うというのを、２０３５年迄に、この金額にするっていう合意になっているんですけど、日本は一体、どのぐらい払うんですかね、って言ったら１割ぐらいって言ったら５兆円ぐらい、払らわされるんですかね（苦笑）」

水島「うわっ」

杉山「冗談じゃないでしょ（失笑）。しかも３０００億ドルは大バーゲンし過ぎだから、こんなので俺達はＣＯ２減らせないという風になったのをグローバルサウスは直ぐ声明を出しています。もう、こういう訳で、非科学的で実現不能なパリ協定も破綻必至な訳ですね」

水島「うん…」

杉山「だから日本が悪い子にならなくても、消えて無くなるのかなっていう気もしております」

水島「いや、本当に、そうですね。ただねぇ…」

藤「あれ、京都議定書って結果的に無くなったんでしたっけ」

杉山「事実上、無くなりました。それは２０１０年に日本が数値目標を提出しなかったんですね。第２約束期間。それで事実上、消滅」

藤「うん」

杉山「形として残っていますけど」

藤「あぁ、未だ」

杉山「誰も気にしてないんですよ」

藤「あぁ、じゃあ、そういう風に形骸化しちゃえばいい訳ですね」

水島「そうでしょうね。上手くソフトランディングというか、まぁ、お役人さんだから、その辺は上手くやって貰いたいっていう気がするんですけどねぇ」

杉山「あぁ、逆じゃないですか、素晴らしい利権が出来上がっていて…」

水島「あぁ、そこだよね、さっき平井さんが言ったけどねぇ」

杉山「２０兆円で特別会計とかねぇ」

水島「やめられないよね」

杉山「役所方はやめられないですよね」

藤「それは、もう経産省は死守しないと」

水島「ね。はい、有難うございます。イーロン・マスクが必要ですな、そうしたらねぇ、日本も。はい。では、石井さん、お願いします」

石井「実は、私も脱炭素が怪しいっていう、お二人と同じ考えですけれども」

水島「はい」

石井「ただ、たまたま、一昨日、今、名前が出た某財閥系の人と、電力会社の人と対談の記事を取材書下ろしで書きまして、４年間、様子見だよって言っていたんですね」

水島「う～ん」

石井「結構、甘いんじゃないかと自分でも引っ張られてしまったんですけれども、大分、変わっているんだなぁって改めて思いました。ちょっとヤバイんじゃないかな。これは、反省しながら書いたんです。今、反省して二つ考えている、その時に思い浮かんだ言葉がありまして、ちょっと上と下が矛盾しているんですけど、マキャベリの有名な言葉で、中立を保つことっていうのは有効な選択肢じゃないんですよと。

勝者にとっては敵になるだけでなく、敗者にとっても助けてくれなかったということで、敵視されるのがオチなのだと言って、今、トランプの政策とパリ協定って矛盾しているんですけれども、石破政権は上手くこれを曖昧にすることで乗り越えようと思っているのかなぁと思って、この言葉が浮かんだんですが、結構、危ない橋を無邪気に渡っているんじゃないかなぁと、僕は思っています。

下は、ちょっと矛盾して、これは個人の話ですけど、その時、思い浮かんだのが、相場の格言なんですね。パーティを楽しみましょうと。但し、お酒の置き場と出口の場所を忘れないでという言葉があって、これは酔っぱらい過ぎちゃいけないけれども、儲けの機会を逃すべきではないでしょっていう、結構、軽いけども深い事を言っているんです」

水島「なるほど」

石井「今、その某財閥系の金融の方の言葉とか、杉山さんの言葉が二つ重なっちゃいまして、ちょっと財界は甘い事を考えている経済界の人達、ちょっと甘い事を考え始めちゃっているのかなぁという感じがして、この変革が奥深く進んでいるような気がしました」

水島「うん」

石井「私は今日、話さないと思って、原子力の話を、あとで言おうと思っていましたが、今、簡単に言っちゃいます」

藤「あぁ、どうぞ言って下さいよ」

石井「はい。原子力っていうのが日本に期待されているんですね。この前、正に首脳会談でも原子力が出て来たんですけど、実は内実がボロボロになっているっていう話をちょっとしようと思ってまして」

水島「あぁ、今の日本の原子力ですね」

石井「そうですね」

水島「はい」

石井「事実上、日本しか造れない状況になっているんですけれども、原子力規制改革は、１０年間も言われていて未だやらなくて、更に、この前の選挙で何故か熱心な議員が安倍派と高市グループだけだったんですけれども、経済安全保障の方々が」

水島「うん」

石井「本当に壊滅したんです」

藤「全部、落ちちゃったからねぇ」

石井「えぇ」

水島「はい、ありますね」

石井「やろう、やりたいと、実は安倍さんも政権を辞めた後に、ある安倍派の会合で、規制やるって言っていたそうですよ。まぁ、これは本当らしいんですけれども、ただ手を付けられなかったと。やり残したものの一つだと言ってくれたそうですけれども。これは結構、ヤバイ、政治がやる気、無くなっちゃっているベクトルが働いていると。日本原電敦

賀２号機が、事実上、潰されちゃったんですけれども、この救済も動く気配が無いと。今、東電柏崎７号機というのが再稼働の話があって、これも結構、日本経済に効いて来るんですけども…」

藤「あれ、凄く効きますよ」

石井「ところが住民投票論を立憲が仕掛けちゃったんですね。あの頭のいい、あの某、あのう、前スキャンダル知事がですね（笑）」

水島「名前を言ってもいいと思うけどね」

石井「さすが、そういうのは頭がいいんですけど（笑）、そうしたら政治争点になって膠着してしまったと。しかも世論調査が新潟だけで半々になっちゃったんです。実は、原発が止まっている所が未だありまして、審査と電源、北電泊というのと電源開発大間の建設が中断していて、規制委員会の一番の問題に戻ります。次が見えないのは結構、深刻な問題で、新型炉開発、笛吹けど踊らずで、誰もやらないんですよ。

これは当たり前ですけれども、電力を自由化しちゃうとファイナンスって誰も立てられないんですね」

水島「うん」

石井「ところがそれをやっちゃって、お金の手当が厳しくなるのと。今、大学での不人気、２０１５年ぐらい迄、逆にあの東電事故の影響で人気があったそうです。人気がそのままだったんですけれども、ここ数年、一気に落ちていて、東大とかは定員、まぁ、細かい話ですけど、東大工学部って成績順に割り振られるんですけれども、あまり、成績が…原子力関係学科、原子炉力学科も無くなってしまったんですが、一気に落ちてしまった、というのと…」

藤「すいません、ちょっと石井さんね、あの柏崎の６～７号の問題で凄くショックを受けているんだけど、あれは何か基本計画を出した時、態々、国際原子力機関（ＩＡＥＡ）の事務局長、グロッシー（Rafael Mariano Grossi）さんを呼んでね」

石井「そうですよ、出したんです（笑）」

藤「６、７号、安全だってお墨付き貰ったのに、次の日か、その次の日ぐらいに、柏崎刈羽の７号機の必要なテロ施設が出来ないから…」

石井「そうそう」

藤「４年も５年も延期って話じゃないですか」

石井「おっしゃる通りです」

藤「何故、こんな、あり得ないことが起きているんですか」

石井「規制委員会が独立で動いているんですよ。統制されないじゃないですか。あれは、手短に言うとテロ施設っていうのは、規制委員会マターなんです。稼働させようっていうのは、経産省と国の願いですけれども、独立機関にしちゃったと。それは反省だと言ったんです。しかもトップが学者ですなんですよ。政治判断をしない人達なんですね。ちょっと、これは…」

藤「あれは本当に経産省は知らなかったのかなぁ」

石井「僕は、経産省と交渉していないって聞いていますよ」

藤「う～ん」

石井「事前調整も無くってプレスリリースしたら連絡が来るって、本当に、それは批判されたからですけれども、未だ続いているそうです」

藤「あれ、そうすると、もう４～５年、稼働できないよねぇ」

石井「そうです。しかも某前知事、スキャンダル知事が住民投票論っていうのを仕掛けて、これは政治的には新潟で盛り上がるでしょう。彼らの選挙にもプラスになるでしょうけれども、これをやると、動かなくなっちゃっている訳ですよ。だから色んな思惑が、こうやってポンって急いでやらないから、こういうことが起きちゃっているんですね」

水島「末期症状っていう感じがするねぇ、ほんとねぇ」

藤「そうですねぇ」

水島「う～ん」

石井「一番、怖いのは、新型炉開発で、結構、閉めたいって言っている企業が増えているそうですね。リニューアルだけで、やっぱり利益は上がらないので」

水島「まぁ、そりゃそうだよねぇ」

石井「２０１５年ぐらい迄、中国企業がアプローチをかけていたんですけれども、実は、中国企業が今、自製を始めちゃって、結構、自分達で回るようになって、今、アプローチも来なくなっちゃったそうです」

水島「う～ん」

石井「ちょっと、これ、怖いんじゃないのっていう感じがします」

水島「うん、拙いですよね」

石井「実際、この前、ベトナムが原子力開発計画、出したんですけれども、ロシアが事実上、取っちゃったんで…」

藤「あぁ、そうでしょうねぇ」

石井「ロシアが強いのは、国策として補助金が付きまくって、教育機関を丸々解放しているんですね。最後のところは狡いから、ロシアって隠しているらしいんですけれども、それを解放してあげているから、そういうパッケージで迫られると日本は負けちゃっていると。しかも東電が主導していたから。東電が今、国営企業になっちゃってちょっと動けなくなっているから」

水島「う～ん」

石井「そういうロシアに負けたと。去年、アルゼンチンが原子力発電で中国に取られたんです。去年、パキスタンが中国産原発を稼働して、もう一個、造りましょうっていう話が

盛り上がっているんですね。ポーランドは日本と今、ロシアが競ってウクライナ戦争後、ロシアを叩き出したんです。日本企業があるんですけれども、今一つ、上手くお金が回っていないと。

トルコは両方だったから、ロシア企業の原発の方が先行してしまったと。三菱とフランス企業の連合が今、止まっちゃっている状況ですね。やるんだったら本気でやって欲しいなと僕は思う訳です」

水島「まぁ、本当に三流化しているっていうかねぇ」

石井「そうです。原子力に気合を入れるって宣言してくれたんだからと思う訳ですね」

水島「う～ん、そうですねぇ」

藤「僕の意見だけど、東京電力って、やっぱり物凄く人材不足リスクが起きているから」

石井「そうです」

藤「テロ対策のあのチョンボだって、やっぱり東京電力の人材不足があるんじゃないの」

石井「あっ、ありますね。東電のミスが多く増えている感じがすることはあります」

藤「あの会社は、もう、あり得ないような単純なミスばっかりやっているでしょ」

石井「そうです。東電の中の人も言っていて、１０年前にはあり得ないことが起きているし、それは人が居ないからです、ごめんなさいと、本当に言っていたので…」

水島「なるほどねぇ」

石井「いや、それは、はっきり言って虐め過ぎちゃった反動ですよ」

藤「そう」

石井「良くも悪くもトップ企業だったので、さっき言ったベトナムの輸出も、東電が主導していたんです、はっきり言って」

水島「いや、だから、今迄、我々も思っていた原発のね、その技術や人材とかね、ものと、全然、駄目になっているっていうことだね」

石井「１０年間、やっぱり、ちょっと悪い事、虐め過ぎちゃったんじゃないかと。それでも解りますよ」

藤「だから、もうかつての東京電力じゃないもの」

石井「そう、ないんです（苦笑）」

藤「申し訳ないけどね」

石井「想像出来ないミスをやっていたんですよ。少しは直ったんですけど、そうしたら、今度、形骸化が始まっちゃっているという話をよく聞きます」

水島「なるほどねぇ。それ、深刻ですね。エネルギーの中心になる一つだからねぇ」

石井「うん。これは、別の所の話で出て来たので、ついでに使っちゃいますが、今、中国

の話が出たので、最後に付け加えておきますと、アメリカの軍事オタクって凄くって、これは素人が作っているんですけども…」

水島「はい」

石井「この赤点は何かって言うと、日本の軍艦と第二次世界大戦、軍艦と船舶のマップですけど、左がフィリピン沖ですよ。これは軍艦だけです。これを見て判ることって、日本の今の海上シーレーンと全く重なっているんですね。つまり日本の軍事史の人達は、何かこれを海戦だぁとかゼロ戦だぁとか騒ぐんですけれども、日本海軍、何をしたかって言うと海上交通線を守ろうとして敗北して、みんな、死んだんです。

それを切断されたから、しかも米国はそれを狙っていたから、で、日本は滅びたんですよ。原爆の前に。今日、別の話の中で図を出そうと思っていたんですけど、この教訓を見ると、全然、今の状況と変わっていないじゃんっていうことですよね」

水島「うん」

石井「東アジア、中国って見事に、ここを狙っている訳ですよね。海上交通線」

水島「うん」

石井「フィリピン、バシー海峡で小船団が壊滅した訳なので、今の日本のシーレーンと全く重なるんですよね。これって、この状況が変わらないのに、さっき言ったように、脱炭素とか、これが優先順位のトップに来るべきなのに、脱炭素とか馬鹿なことをやっている日本って、もう少し勉強しようよっていうことを言うのと、あと、国会検索システムを、この前、突きつけたんですけれども…」

水島「うん」

石井「バシー海峡、日本の海上交通線っていう言葉を使ったのが河野太郎さんと、あと、名前を忘れちゃったけど、二人ぐらいしか居なかったんですよ。いかに日本のエネルギー政策って、ちょっとずれているなぁっていう話を思ってしまいましたね。検索が今、出来るんですけれども」

水島「凄くよく解りました」

石井「すみません」

水島「原発を中心にかくもこうなっているっていうね。一種の惨状ですよね、もうねぇ」

石井「これ、火力も、あとで話しますけれども」

水島「はい」

石井「火力も結構、厳しい状況になっていると」

水島「いや、そうじゃないかなぁと思いますね」

石井「石炭虐めっていうのがあって、さっき杉山さんが言ったアンモニアとかも、経産省は解ってやっているんですけれども、石炭をあれに混焼させて、石炭を延命するという目的が裏目的であるんです」

水島「うん」

石井「あんまり、ちょっとは言っているんですけど、積極的には言っていないんですけど、そういう馬鹿なこともしなくちゃいけないのに、エネルギーで、ちゃんと議論できないと、この前の…」

水島「なんだかねぇ」

石井「え一と、第７次エネ基、まぁ、僕は問題が沢山あると思いますが、少し進歩したんですけれども、新聞の論調が酷くって反脱原発のことしか言っていないんですけど」

水島「うん。あぁ、反脱原発ね。はい」

石井「そうじゃないでしょ。今、皆さんがおっしゃったような論点が山の様にあるのに」

水島「そうですねぇ」

石井「それを議論しない日本の世論っていうのも、ちょっと…、世論の方は賢いと思っているんですけれども、活動家プラス特定政党プラス、メディアの変な、奇妙な連合体ですね。それが言論空間を壊しているんじゃないかなぁと思うところであります」

水島「あぁ、そうですね」

石井「正に川口先生が今からドイツのことをおっしゃって下さると思うんですけど、非常に似ている不気味さがあるなぁと思いますね」

水島「う～ん。なるほどね。メディアは間違いなくそういう雰囲気でつくってきたしね」

石井「はい」

水島「それに付随するＮＧＯとかね」

石井「うん」

水島「だからＵＳＡＩＤのね」

石井「はい」

水島「あの問題っていうのは結構、大きいね」

石井「うん」

水島「つまり、アメリカのそういうところをやって、政治的なこういうものをボランティア団体とかＮＧＯと称する人達に利権とメディアを繋げて思う通りでやって来たっていうのがねぇ…」

石井「はい。あと一つだけ付け加えると、笑い話があって、経産省が発表して、あまり、報道しなかったんですけど、この前の第７次エネ基のパブコメって４万１千って過去最高だったそうです」

水島「うん」

石井「ところが１割は同じ人が書いていたそうです（笑）」

水島「え、何、同じ？」

藤「(笑)」

石井「４千百の内、複数投稿が４千百あって、一人で４８０通、書いた人が居て、それが、どうもＡＩを使ってですねぇ…」

藤「あぁ～っ」

石井「ちょっとずつ書いて（笑)」

水島「あぁ～そうかぁ」

藤「そういうのは生成ＡＩ、得意ですな」

石井「そういうのを、実はそういうのも、少しずつバレて来ているのかなぁと」

藤「それ、１割？」

石井「１割が同じ、ほぼ同じ人が複数投稿の人達で…」

水島「いや、それは今、本当にどこもかしこもインターネットの流行っているっていうかねぇ、そういうのがあると思うので」

石井「だから、そういうのを白日の下にバラして行って…」

水島「そうですねぇ、情報をね」

石井「建設的な議論を、この場で繰り返したいなぁと思っているところです」

水島「はい。有難うございます。では、お待たせしました。川口さん、お願いします」

川口「はい。宜しくお願いします」

水島「はい」

川口「今、石井さんがおっしゃいましたけれど、ドイツと日本が今、やっていることは、かなり似ていると思います。私ね、トランプ大統領が就任して以来、突然、本当のことを言ってくれるから、何か凄く清々しいと言うか、世の中がパッと霧が晴れたみたいな気がしているんですけれど、だけれどドイツでは、トランプのようなとんでもない人がアメリカの大統領になっちゃってとか、とにかくドイツのメディアは悪口の言いたい放題みたいな感じに今、なっているし、政治もなっていて、それで本当だったら、アメリカっていうのはドイツにとってもヨーロッパにとっても一番の同盟国、一番、大切な同盟国であるはずなのに、ドイツの首相は、もう同盟国ではないというような言い方までしているんですね。

それで、それに対して一体、ＥＵの中の誰が賛成しているかっていうのは未だはっきりしないんですけれど、ちゃんと反対しているのは、例えば、イタリアのメローニ一首相で、彼女は、アメリカは一番、大切な同盟国であるから、だからアメリカ抜きでのヨーロッパというのは、ヨーロッパの防衛っていうのは考えられないって、はっきり言っています。ですから、その内、ドイツが、また段々孤立していくんじゃないかなと私は懸念しています」

水島「うんうん」

川口「先程、本当のことを言うっていう風に申しましたけれど、例えば、今迄、やっていたのが、みんな、いかに嘘だと思っているのに本当みたいな顔して色んな事をやっていたかという風に、私は、ずっと思っていましたし、そう思っていた方は沢山いらしたと思いますけれど、政治家自体も多分、知っていてやっていたと思いますけど、例えば、ウクライナは頑張ればロシアに勝つみたいなことを言っていたから、どんどん、武器を援助しなきゃいけない。資金も援助しなきゃいけないって言っていますよね。

でも、あんな、ウクライナみたいな小国が、いくら頑張ったってロシアに勝てる訳が無いって、そんなこと中学生でも解ると思うんですけれども、誰も言わなかったじゃないですか。それで民主主義の為にと言って、我々は応援しなきゃいけないって言って、ゼレンスキーが民主主義の何か権化みたいな感じになって、何か宗教の教祖を、みんなで拝むみたいな感じで、あちこちに行ったのをみんなで応援していたというような状況だったんですけれど、それを一言で、いや、それは違いますよっていう風に言ったのが、トランプ大統領だったと思うんですよね。

あとエネルギーに関しては、ＣＯ２が無くなれば経済がどんどん発展するって、これはＥＵの欧州委員会のフォン・デア・ライエン（Ursula von der Leyen）委員長が、ずっとグリーン・ディールを生み出した人ですけれど、彼女がずっと、そういう風に言っていましたけど、ＣＯ２が無くなったっていうことは産業が空洞化した結果であることはあり得ても、経済がそれによって発達するっていうことは、普通、誰が考えてもなかったけど、それを誰も、そんなこと違うんじゃないですかっていうことさえも言わなかったんですよね。

ウクライナの戦争に戻りますけど、これも、みんな、民主主義の為にだとか、環境の為だとかっていう風に言っているんですよね。でも、例えばウクライナで突然、トランプ大統領がレアアースだとか、そういう話をし始めましたよね。そうしたら、今迄、３年間、レアアースが問題になったことっていうのは言葉に出た事って一度も無いですよね」

水島「うん」

川口「それが突然、何か空から降って来たみたいに、トランプ大統領が当たり前のように、レアアースの話をした途端、みんながレアアースのことについて何か話し合ったりして、どれだけ、みんな、嘘ついてやっているんだみたいな風に私は感じました。それから平井さんもおっしゃいましたけれど、グリーン何とかっていうのは環境じゃなくて、全てお金の為だと。

ウクライナの戦争は民主主義の為だなんて、やっぱり、これもお金の為だと。そういうことを、はっきりと言ってくれたのがトランプ大統領で、でも、それを、あたかも品が無いとか野蛮だとかみたいな、そういう風に言って頭が悪いって言っている人も居ますけれど、そういうことを言っているのが今、ドイツの政治家、及び知識人と言われるテレビに出て来る人達です。

でも、そうじゃなくて YouTube にしか出て来ないような人達、知識人も居るんですけど、その人達は最初から、そういうことを全然、言っていませんでした。ですから今、突然、トランプ大統領が来て、何か王様は裸だって言って、そういう風にいった感じで、そうすると、みんなが、やっぱりね、それを正直に、彼の言っていることは大体、解り易いし、

多分、庶民にも解るように喋ってくれているんだと思うんですよね。回りくどい変な言い方をして、偽善の話を創るんじゃなくて、直接的に本当のことを言ってくれる。だから解り易いと。

そうなると、庶民だって発言し易くなりますよね。庶民だけじゃなくて、例えば私なんかでも今迄、言っていたことって、あぁ、これを書くと、４０％ぐらいの人は何か変な奴だと思うだろうなぁとか思いながら書いていましたけど、まぁ、今も思われているかもしれませんけど、でも言い易くなったっていうのは本当に確かなことだと思うんですよね。

ですから、このドイツが、これから、ずっとトランプの悪口を言い続けるとは思えないですけれど、日本も同じですよね。割と否定的なニュースばかりが表に出ています。でも、そうじゃない人達っていうのが沢山、居たはずですから、その人達の声が今からどんどん強くなって、そういう人達が発言できるような状況が来れば、世間の意見っていうのは、パッと変わっていくんじゃないかなぁという風に、私は期待しています」

水島「うん。はい。この間の選挙でＡＦＤが今度、第二党になったっていうんですけど、ＡＦＤは、このエネルギー問題についてはどういう形になっているんでしょうかね」

川口「ＡＦＤは、エネルギー問題だけじゃなくて、他の問題も全て一番、真面なことを言っていたと、私は思っているんですね」

水島「はい」

川口「例えばエネルギー問題に関しては、もう絶対に原発を直ぐに再稼働するべきだっていう風に言っていましたし、それからパイプラインですね」

水島「はい」

川口「この２０２２年、ウクライナ戦争が始まった時の…」

水島「ノルドストリームですね」

川口「９月に、ですね」

水島「はい」

川口「パイプラインが何者かによって破壊されて、ロシアからドイツに海底で繋がっていたノルドストリームっていうパイプラインは４本、あったんですけど、第１と第２が２本ずつ４本あって、その中の３本が破壊工作で破壊されたんですけれど、ドイツ政府は未だに誰がそれをやったかっていうのを調べているって言いながら調べていなかったんですけれど、ＡＦＤは最初から、あれを修繕して、とにかくドイツ産業を潰さない為には、安いエネルギーが必要であると。一番安いエネルギーは一体、何かって言ったらロシアのガスであると。安くて信用のおける、ちゃんと発電したい時に発電出来るエネルギーっていう意味ですけれど」

水島「うん」

川口「それは原発とガスであるから、その一番安いガスは何処から入るかって言うとロシアからだから、とにかく、あれを修繕して使いましょうと言って、何を寝ぼけたことをという風に思われていたんですよね。でも最初から、それを言っていました。そうしたら、

つい最近、２～３日前だと思いますけれど、トランプ大統領がプーチンにあれを修繕しましょうって呼びかけていますよね。それで（笑）それは凄く意外なことで、ドイツ人はみんなビックリして、直ぐにＣＤＵのメルツ党首ですね、今度、首相になるって言われている人ですけど、彼が絶対にそんなことはあり得ないと。ドイツは、そんなロシアのガスなんかは絶対に輸入しないって言い切っていますから」

水島「あぁ」

川口「もう、つける薬がないんですけど、そういう状況ですけれど、トランプとプーチンがあれを修繕して、安いガスをドイツに、ドイツって言うかヨーロッパに入れるべきではないかみたいなことを、だから、まぁ、私達から見たら、破壊したのは誰だか判らないって言いますけど、ひょっとしたらバイデン大統領がやっていたんじゃないかなぁっていう風に思っている人は沢山、居るんです」

水島「うん」

川口「それを、その後任であるトランプ大統領が修繕しましょうって言った、凄く何か、愉快と言うか、私にとっては愉快だし、だからＡＦＤはエネルギー政策もそうだし、それから、例えば青少年を惑わして家族制度を破壊しそうなＬＧＢＴプラス保護政策とか、国民をどんどん社会福祉に依存させるような行き過ぎた社会福祉とか、それから産業を破壊するＣＯ２削減とか、あとは、あっちこっち財政をゆるゆるにして、凄い借金を増やして、途上国にもばら撒いたとか、そういうのは全て悉く反対して来ました」

水島「はい」

川口「だから一番、真面な政策を掲げている党だと思っています。でも、これを言うと、また凄く非難されるんですけど、日本だから言える意見です（微笑）」

水島「ねぇ。だからＡＦＤっていうのは、日本で訳されると極右っていうね、極端な右ということになる訳ですけれどもね。川口さん有難うございます。今の話で言うと今日、別の番組でも言っているんですけれども、大袈裟に言うとね、今、トランプとプーチンがくっついている。英仏が今、ゼレンスキーを応援しているっていう形になっている。で、アメリカのホワイトハウスから追われたあとで行ったのがイギリス。それで首相に慰められたっていう話になっています。

この中で、やっぱり面白いのは、もう、やっと、みんな、外へ出始めたんですけれども、ゼレンスキーっていうのは、どっちかと言うと、まぁ、英国の諜報機関ですけど、ここのＭＩ６と大変、密接な関係にあって２０２０年、ＭＩ６の長官のリチャード・ムーアとの会談をして以降、ウクライナの大統領でありながら、彼の警備は全部ＭＩ６ということが、はっきりしている。

つまり、いかに今、トランプと喧嘩をやってもイギリスが応援するっていうのは、ずぅっと、そういう、あぁ、それでフランスもそうですけれども、つまり我々がグローバリスト、グローバリズムと言っていた、もっと言えばディープステイトと言ってもいいんですけれども、ロスチャイルドを始めとする、そういうヨーロッパ、或いは、もっと言えば世界をずぅ～っと支配して来た、影響力を与えて来た、そういうエリート層と繋がっていたということ、まぁ、そういう意味ではね、これは非常に、あのう…」

藤「それは公開の情報ですか」

水島「はい」

藤「報道ですか」

水島「そういうことですね。これはね、一応、発表しているのはイーロン・マスク系のジョージ・クリスティンっていう人が実は今、詳細に発表し始めている」

藤「いや、今の話で本当に腑に落ちましたよ。最初に２０１９年にゼレンスキーが大統領になったじゃないですか」

水島「うん」

藤「あの時に映像が出て、四者協議とかやっているんですよね」

水島「うん」

藤「プーチンさんとゼレンスキーさんとマクロンと、それから当時、メルケルかな。あの頃は物物凄くロシアに融和派だったんですよ。ロシアに融和的だった訳ですよ」

水島「あぁ」

藤「大統領になった時は」

水島「うん。そうそう、そうそう」

藤「それが突然、変わったんだけど、あぁ、多分、そういうことがあって…」

水島「それがあるのと、もう一つ、覚えていると思うけど、ロシアと戦争が始まったあと２週間でやろうとしたでしょ」

藤「うんうん」

水島「あれをジョンソンが乗り込んで、というようなことで、和平を潰した訳ですよ」

藤「うん、だから、今回は、やっぱり絶対にイギリス主導ですよね」

水島「そうなんです」

藤「だからアメリカの見方は、ただイギリスだけがひたすら固執しているっていう話ですよね」

水島「そうです。だから、ある意味で言うとアメリカと今迄、ヨーロッパが一応、繋がっている、ＮＡＴＯで繋がっているって形になっていたけども、実際の問題として、さっきのノルドストリームもあるんだけど、これはロシアとアメリカの関係というのをちゃんと見ておかなきゃいけないね。これは中々指摘されないですけど、まぁ、これは、別の枠で紹介したんです」

藤「いかにもＭＩ６がやっているという感じがしますね。イギリスがやっていますね」

水島「ＮＡＴＯ東方非拡大の１ミリもって、これは機密文書でオープンされたんですね。やっぱりトランプになって良かったと思うんですけど、これが１インチと、この文書ですね。これが公開されているんですけど、えー…」

藤「トランプ政権になってから公開されたんでしょうねぇ」

水島「そうです。それで、ここで、このベーカー国務長官、ゴルバチョフ、シェワルナゼ外務大臣ってね、こういった人間が…」

藤「あぁ、ＮＡＴＯは東方拡大しないっていう時の文書ですね」

水島「そうです。『東側諸国の安全保障上の懸念を理解している』と、ベーカーですね。それで『もし、米国が統一ドイツ（つまり東西ドイツ）をＮＡＴＯに留め置く場合』、これを認めるなら『ＮＡＴＯの管轄（Jurisdiction）が東に１インチたりとも拡大しない。（there would be no extension of NATO one inch to the east.)』

藤「そうですね」

水島「これは、ちゃんと文書として残っているということがあって、ただ、それは全部、破られた。ずぅっと破られて東方のソ連の衛星国だとか、みんなＮＡＴＯに入って…」

藤「ですから、クリントン２期政権が破りましたよね」

水島「そういうことです。クリントンが」

藤「あれは何故…」

水島「公然と破ったんです」

藤「あれは何故なのか、その理由をご存じですか」

水島「ん？」

藤「その理由、クリントン２期政権が何故、東方拡大したか」

水島「もう、これは、所謂、東寄りの、ソ連のね…」

藤「そうじゃなくて二期目の大統領選挙がヤバかったので、アメリカでもポーランド移民の票が欲しかったんですよ」

水島「あぁ、まぁ、それもあるだろうけどね、実際、戦略的に見るとね…」

藤「いや、クリントンさんは、そんな戦略的って考えていないです。だから戦略なら未だ許せるんですけど、大統領選挙の時にポーランド移民の票が欲しいからと言ってポーランドを入れちゃったんですよ」

水島「うん」

藤「そこから始まって、実は民主党は、そんな、しょうもないところからやっているんですよ」

水島「きっかけは、そうだったんだけど、ただ、私から見れば、ヨーロッパの支配層っていうのはね、やっぱり、どんどん拡大していくっていうね、これは戦略的にずぅっと続いて来たね、ついにエストニアからバルト諸国まで入れちゃったでしょ」

藤「まぁ、だからアメリカが全てやってくれるからっていう、虎の威を借りる狐みたいなものですよね」

水島「うん、やっちゃったんだよね」

藤「うん」

水島「もう一つね、敢えて、今日、言っておくと、ドイツの今度のメルツという首相は、かつてブラックロックのＣＥＯですよ。あの最大の金融機関のね、だから、あのノルドストリームの復活なんていうのはね、もう絶対に反対ですよ。それと、もう一つは、一番、地政学的に、皆さん、考えなきゃいけないのは、もしロシアとドイツがノルドストリームを復活させちゃったら、一体、どうなるか。イタリア、ハンガリーとかこういうのは、みんな、トランプと一緒に。

英仏という、こういったディープステイトって言われた、かつて１９世紀以降、ヨーロッパに影響を与えて来た国際金融資本とか、こういったものが、実は、非常に狭められる、潰されるとは言わないけども、ドイツとロシアがくっついたら悪夢。それはフランスとイギリスが昔から考えて来たことだけども、これがトランプの仲介で出来ちゃう可能性もあるというね。今はメルツっていう、あのＣＤＵっていうキリスト教民主同盟になっていますけど、そのぐらいのことまで、今、実はトランプ、ロシア連合っていうのが…」

藤「いや、だから僕は川口さんの話に驚いていて」

水島「うん。そういうことなんだよ」

藤「元々７０年代にはドルジバっていうガスパイプラインを引いて、それから、ずっと、ノルドストリームってやっているんですけど、大体、アメリカって共和党政権の時には、それに反対していたんですよ」

水島「うん」

藤「だからトランプさん、ちょっと共和党じゃないですか」

水島「うん」

藤「共和党で初めてやれと言ったので、さすがトランプさんかなと思いましたね」

水島「いや、そうですよ。だから今迄の、例えば丁度、ゼレンスキーと一番、仲の良かった上院議員が、今日、ちょっと別の番組で紹介したんだけど、もう１８０度どころじゃない、もう辞めるべきだとか」

藤「あのグラム上院議員でしょ」

水島「あぁ、グラム、そうそう」

藤「うん、共和党のね」

水島「これが、だからタッカー・カールソンという人が、グラムは先の事を判っているんだと、どうなるか。ここまで図々しくと言うか面の皮が厚いなぁっていうのはねぇ、もうゼレンスキーも驚いたと思うんだけど、一番の味方だった応援しようって言ってた奴がね」

藤「だから、もうパイプラインといっても、実は半分以上はドイツ企業とかドイツとかオーストリア企業が金を出しているんですよ」

水島「うん」

藤「だから本来ならドイツ人とすれば、その自国企業の為にその権益を守ってあげなきゃいけないのに、それをやらないって言っているのも何か凄い話ですね」

水島「そうだよねぇ」

藤「でも、まぁ、日本であのサハリン２ってやっていたのが三菱商事とか三井物産の権益があるじゃないですか。それをやられちゃいましたと」

水島「うん」

藤「それを絶対に修復しちゃいけないって日本政府が言っているのと同じようなことですから」

水島「本当にそうなんだよね。やるべきなのにね」

藤「うん」

水島「前にも藤さんとも話したけど、あの樺太宗谷間のね…」

藤「はい。パイプラインですね」

水島「あれ、パイプラインを造れば４０キロしかないから」

藤「そうです」

水島「物凄く安価な液化しない天然ガスを北海道に供給するから、劇的に電気料が下がるんですよ」

藤「あのう、ガス代金が一桁、違いますから」

水島「ね」

藤「うん」

水島「だから、それを絶対にやらないっていうのは、前のバイデン政権迄の流れがあって、ロシアとくっつけないとか、そういう考えもあった…」

藤「うん、そうか、トランプさんが修復しろと言いましたか。やっぱり凄いな」

水島「だからね、今言った川口さんの話があると、もっと壮大な構想を持っているんじゃないか。ヨーロッパ、ドイツまでっていうね」

藤「うんうん」

水島「そうするとロシア、アメリカ、ドイツと、今迄の米欧関係っていうのが根本的に変えられる」

藤「いや、もっと言っちゃうと、さっき冒頭、言いましたけど、チャーチルさん辺りが、鉄のカーテンって言い出したから…」

水島「うんうん」

藤「冷戦でアメリカをヨーロッパに引き摺り込んだじゃないですか」

水島「うんうん」

藤「本来なら９０年に終わっているんだけど、未だずぅ〜っと残滓が残っていて、特に、バイデンだとか、あのう…」

水島「バイデンまでは、そうですよ」

藤「えぇ。そういう連中が居たじゃないですか。超対露強硬派、それを全て総ざらいして、我々は本当に冷戦は本当に終わったと。モンロー主義じゃないけど、そっちに戻りますという宣言をしているっていう意味では、ヨーロッパは真っ青になりますよね」

水島「いやいや、それは大変なことですよね」

藤「う〜ん…」

水島「それとロシアとアメリカが強いのは、さっき、おっしゃってくれたけど、どっちも自前で全部、生きていける」

藤「あぁ、そうですね」

水島「食糧もエネルギーも軍事も政治も、いくら何かやったって自分で生きていけるっていうね、それがこの間言った、サンクト・ペテルブルグからアゼルバイジャン、イラン、インドのムンバイですか、鉄道を造っちゃうって。こういう形のつくり、それにトランプが乗ろうとしているっていうね。これは結果として、日本は、あとで問題になると思うんだけど、中共の包囲網が、実は日本がロシアと仲良くなって、トランプとなると北朝鮮も問題が無くなっちゃうから、拉致被害者も帰るかも分かんないですよ」

藤「うん」

水島「そうなっちゃうと、中国が一番、困る」

藤「そうです」

水島「だから、そうなると、今、外務大臣と首相が中国にベタベタだから困ってしまうっていうね。だから今、言えないっていう状況もあるというねぇ。それで、さっき言ったように利権で全部、やっていたのが、平井さんがさっき色々言ってくれたけども、こういうものの構造が全部、暴かれちゃうかも分かんない」

平井「そうですね」

水島「うん」

平井「でも、これは今こそ暴くべき時ですよ」

水島「そうですよね」

平井「えぇ。そうでないと、この国はおかしくなりますから」

水島「うん、だから、これ、トランプに乗っかる訳じゃないけどね、こういう機会で、我々の国も一回、掃除をね、ちゃんと、やらないと駄目だっていうねぇ」

平井「そうです。大掃除の時に来たと思いますよ」

水島「そうですね」

平井「もう、あまりにもチリとゴミが溜まり過ぎて」

水島「うん。だから、そういう意味ではねぇ、まぁ、いい機会に出来るかも分からない。でも、まぁ、あとで、また皆さんに伺いたいんですけど、うちの内閣で出来るんかいっていうね（苦笑）、ということがあると思うんですけども、それと、今日、お出で戴いているのも前から水力とか、所謂、自然エネルギーっていう中で、水力ともう一つ地熱っていうのが、日本では地熱はコストがかかるかも分からないけどもね。そういう可能性っていうのは本当に無いのかどうか。これも、ちょっとやりたいと思うんですけどね。どうですか、今、そっちの世界情勢はあれとしても、ですね」

竹村「うん、せっかくエネルギーっていうテーマで呼んで戴いたので、エネルギーの話をしたいと思うんですけど」

水島「はい」

竹村「私は事業をずっとやっていまして、今、僕達が住んでいるのは１００年前、５０年前の先輩達が造ったインフラの上に、この文明を享受しているんで、今、僕がやんなきゃいけない、僕自身ですね、皆さん方も色々あるでしょうけど、僕がやらなきゃいけないことは、今生まれた赤ちゃんが５０歳ぐらいになった時の日本はどうなっているのかっていうことで何を用意しておかなきゃいけないのか、僕が生きているのは、先輩が作った文明で生きているので、今、僕がやることは５０年後の子供達がどうやって生きていくかっていうことしか考えていない人間なので…」

水島「うん」

竹村「そういう意味ではドメスティックです。ちょっと水力の話をしますけど、基本的に今、自力で生きていかなきゃいけないんですよ。全部、自力でいけるとは思わないですけど、自力でやろうよっていうことをやらなきゃいけないと思いますので、それを紹介します。

水の文明、この水力っていうのは、もうお解りのように太陽、お天道様があればね、それが循環して約１５日間で、みんな、戻って来ますのでいいんですけど、お天道様の弱みは対面積当たりが物凄く薄いんですよ。その総量は膨大ですけど、太陽光、風力、火力も雨も対面積当たりのエネルギーはめちゃくちゃ薄いんです。だから、これは非常に困ったことですけど、ところが日本は対面積の薄いエネルギーが集まって日本中に流れているんですよ。これは一つの例ですけどね。今、若い者は、こういうことを知らないので、態と、みんなさん方、もう今更、こんな、ふざけた画を出すなって言うんですが、意外と、このことを知らないんですね。

この日本列島は７０％が山なので薄いエネルギーを、この日本列島の国土は水の水流として集めてくれるんですよ。こんな国は無いですよ。７０％の国土が薄い太陽エネルギーの雨を集めてくれると。もう一個、凄い事は北海道から沖縄まで背梁山脈があるんですよ」

水島「うん」

竹村「背梁山脈があって何をやっているかと言うと、日本海側にも太平洋側にもエネルギーで均等に流してくれるんですね。全ての市町村がエネルギーを持っているんです。こんな国は無いです」

水島「うん」

竹村「ですから日本列島そのものが、雨という薄いエネルギーを集める装置なんです。日本列島そのものはエネルギー装置という考え方ができます。ですから、日本の水力発電を、もう一回、整理しますと、まずアジアモンスーンの北限にあって物凄く雨が多い。そして海に囲まれていると。７０％の山地が雨を集める装置だと。みんなの平等な背梁山脈があると。

私共のダムというのは、太陽エネルギーを集める貯蔵庫だということを前提としてお話ししますけど、これが日本列島の流域で分けた日本の図です。この日本の流域の１３０の大きな、まぁ、もっとあるんですけど、１３０に分解された単独の流域で、日本人が生きていくことが出来るんです。何故かと言うとエネルギーがあるから。エネルギーを使い切ってない訳です。

皆さん方の国際的な話で色んな話がありますけど、今、僕がやることは５０年後に向って日本国内で水力という形で、どうやって何をやるべきなのかということに注目しますと、実は、これは大東亜戦争の直前の世界のエネルギー分布ですよね。アメリカは圧倒的だった訳です」

藤「そうですね」

竹村「つまり今でもそうです。データを見ると、今でもアメリカは圧倒的です。結局、日本のこのエネルギーの苦しみは首根っこを押さえられて、窮鼠猫を嚙む形で戦争に飛び込んじゃったんですけど、今、この戦争、グリーンだとか綺麗事を言っていますけど、エネルギーが無くなったらどうなるかって言うと、これは前回ここでやった時、私に電話で非常に注文がありました。あれをもうちょっと見せてくれって言うので、今日は北海道から沖縄まで全部、お見せします。

これが昭和２０年の北海道えりも町です。木が無いんですよ。これは青森県十和田湖です。これは東京都奥多摩町です。ずっと南へ行きますよ。これが神奈川県の伊勢原市、神奈川県の南足柄市…」

藤「あぁ～禿山ですねぇ」

竹村「禿山です。山梨県山梨市、静岡県の由比町、長野県信濃川上流。これは滋賀県大津市一丈野国有林。これは山林、治山事業をやっている所ですけどね。滋賀県野洲市立石国有林。京都の山科区。京都府京都市比叡山。比叡山は、こんなに禿山だったですよ。信長の比叡山焼き討ちなんて罪が軽いもんですよ」

一同「（苦笑）」

竹村「僕達の庶民が、この木を切りました。これは岡山県玉野市、山口県の防府市。これは香川県の高松市。佐賀県佐賀市富士町」

水島「うん」

竹村「鹿児島阿久根市。沖縄本島北部」

藤「いやぁ～ほんとにねぇ、禿山」

竹村「誰がやったかと言うと、僕達の爺さん、婆さんが切ったんですよ」

藤「ふぅ～ん」

竹村「僕達の爺さん、婆さんが生きる為に切っちゃったの。つまりエネルギーが無くなるということは、こういうことだっていうことで、極めて重要なことです。だから全てのエネルギーが大事な訳です。僕は今日、誰も言っている人が居ないので水力を言いますけど、水力が大事だって僕は言いますけど、他のエネルギーも大事です。原子力も大事です」

石井「これ、禿山化というのは戦争で加速したんですか」

竹村「エネルギーが全部、戦争に投入されたので庶民に回らなかったんです。しょうがないんです。それはしょうがないですね」

水島「庶民も切った訳ですね」

竹村「庶民、庶民。要は庶民の人が切った。これがいけないって言うので、昭和天皇が全国を行幸して、びっくりしたことは日本中が禿山だったということで、第１回『植林行事ならびに国土緑化大会』という植林祭をやるんです」

水島「うん」

竹村「山梨県甲府市山宮町で、昭和２５年にやるんです。農林省は今、自分達が植林祭をやっているなんて威張っていますけど、実は昭和天皇から始まったんです。昭和天皇がお始めになられて、今、こうですよね。つまり我が国が、これから５０年後のことを考えた時、本当にエネルギーを持っているアメリカが最後まで助けてくれるのか、今でもアメリカはエネルギーが足りなくなっていますんでね」

水島「うん」

竹村「５０年後はＡＩのＩＴで…」

水島「ＡＩも相当、使いますからね」

竹村「ＡＩとか言って…」

水島「原発も造るって言っているし。はい」

竹村「これから水が約４倍、必要になって来る。アメリカが苦しいのは、水が４倍必要でも、あそこの国には水が無いですからね。あそこは水で行き詰ると思います。中国も水で行き詰ると思います。インドも行き詰ると思います。日本は未だ余裕があるんです。という話を後程、したいと思いますけど、今、日本の５０年後、僕はやらなきゃいけない。皆さんは、どうだって、僕がやらなきゃいけないインフラは、５０年後に向って、どうやって水力を増強していくか。

今、自分達の出来ることは水力ですからね。エネルギー、原子力やろうとかガスをやろうということもありますけど、今、国内でやることはエネルギー、水力を増強したらどうか

というのが、私の今日の意見で、後程、未だ余地があるんだということを是非、皆さん方に解って戴いて、もうダムは造れないんだと、もうダムは中々造れません。でも、やり方があるんです。物凄くいいやり方があるんですという話を、今日は後程、後半でお話ししたいと思います」

水島「我々のエネルギーの水力は今、どのぐらいですか」

竹村「今、１０％ですね」

水島「１０％」

竹村「えぇ。１０％」

水島「これを一生懸命、色んな形でインフラ整備とかをやったら、どのぐらいまでいきますか」

竹村「僕は３０％いけるんじゃないかと思うね」

水島「あぁ、あと２０％増えるということですか」

竹村「えぇ。増えると思います」

藤「それは凄い事ですよ」

竹村「凄いことです」

水島「それが出来たら凄いですよね」

竹村「３０％いったら他のエネルギーとタイアップして、僕は自立できると思います」

水島「うん、とにかく日本の国内ですからね」

竹村「国内です」

水島「輸入とか、そういうのが無いからね」

藤「国産エネルギーですから」

竹村「えぇ」

水島「というようなことと、これも平井さんが行ったと思うんですけど、ラピダス」

平井「えぇ。ラピダスね」

水島「水と電気のフォローが未だ出来ていないんですよね」

平井「出来ていないですねぇ。特に電気代はめちゃめちゃ高いですし、もう一つ問題なのは、半導体を作る為の一部のガスが青函トンネルを通れないんですね。危険物だから危ないのでフェリーで運ぼうなんていう話もあって、あんな馬鹿な物流コストをかけて、どうするんだと。あと、もう一個は北海道には半導体関係の仕事をした会社が少ないです」

水島「でしょうね、それは」

平井「圧倒的に少ないです。だから、それを一々教育して育てるのかっていう話ですよ。

これも結局、番組だから言っちゃうけど公明党が北海道にしろと主張したらしいじゃないですか」

水島「いや、そうですよ」

平井「そうですよね」

水島「強いですよ。物凄く強いですよ」

藤「公明党が言ったんですか」

平井「公明党ですよ」

水島「あそこは公明党が強いんですよ。実際の自民党より強いっていう噂がね」

藤「だから筋の悪い話が出て来たんだなぁ」

平井「いやぁ、もう、あんな訳、なんで北海道ですかっていう話です」

石井「実は、僕、熊本に行ったことがあるんですけど、熊本の半導体産業っていうのは、インフラが凄くしっかりしているんです。だから誘致が出来たんです」

水島「その下請けが結構、色々用意できる環境があったから」

石井「はい、そうです。あと、大学も態々創ったんです」

竹村「圧倒的な地下水ですよ」

石井「そう」

竹村「圧倒的な地下水もあるし、これは凄いです」

水島「なるほど」

石井「あと、九州電力は原発も稼働しましたから」

藤「いや、それは大きいよ」

水島「いや、それは本当に大きいよねぇ」

平井「ねぇ」

水島「だから電気は足りないね。今、普通で、もう一番、高いし…」

藤「(笑)」

水島「泊原発が止まっていますからね。だから一体、２兆円もかけてどうするんだろうっていうね。ＩＢＭは入るっていうから、結局、又、お金使って利用されるだけみたいなことがね、何か、そのねぇ…」

藤「実現、出来ないでしょう」

水島「出来ないでしょう。いや、そうなんだ」

藤「だって、私の２年上の先輩が何か人質で顧問として入りましたけどね」

水島「あぁ」

藤「あんなのは出来ないですよ」

一同「（失笑）」

水島「それ、入った奴が言うんだから（笑）、我々外の奴が無理だろうっていうのは、当たり前だよね（笑）、笑い事じゃないんだけどね」

藤「いやいや本人は絶対、好きで行っていないですよ。もう人質みたいなもんですから」

水島「ねぇ。だから、それで、ただ中国人だけは相当、千歳の辺りを買いまくっているっていうことで、地価が、我々の仲間も…」

藤「まぁ、それだけで儲かりますからね（笑）」

水島「っていうことだけどね」

藤「今回、無かったら赤字だけど、周りの土地を買って売ればね（笑）」

一同「（笑）」

水島「いやいや本当に壮大な残骸と言うかね、さっき竹村さんがおっしゃっていた５０年後の子孫に残すどこじゃなくてね、ツケを残すみたいな感じになる可能性がある。これ、杉山さんはどうですか。こういう半導体をやりながらと言っても、電気と水道はめちゃくちゃ必要で、水道って言うか水はね」

杉山「ラピダスの話で言えば、今、政府が言っているのは、これからの半導体はグリーン電力で製造しないと」

水島「はぁ～…」

杉山「世界に売れないから」

藤「（笑）」

杉山「グリーン電力の集積地に半導体工場を建てる。ついては北海道中に風力発電の風車を並べて…」

水島「駄目だ、こりゃ」

杉山「発電し過ぎたら東京に売らなきゃいけないって言うんで、送電線を新潟までと福島までと２兆円ずつかけて合計４兆円を引くって言っていて」

藤「３０代、４０代の経産省の人達って、もう洗脳されていますもん」

水島「おぉ～、いや、何故、そんな、今、皆さんが言っている事、凄く真面なことを言っていると、視聴者はみんな、解ると思うんだけど、何故、こういう人達はリアリズムを感じてしまうんだろう（苦笑）」

藤「いや、リアリズムなんて感じた瞬間に、出世競争から外れますもん」

水島「あぁ、そう」

藤「うん」

水島「怖いね、これ、もう」

平井「政治家が、あんなの自民党の１００人以上が再エネで議連に入ってね」

水島「まぁ、そうだよね」

平井「再エネ、チューチューやっているのが、もう再エネ賦課金チューチューやっているのがね、そうやって引っ張られているんだと思いますよ」

藤「その為に自民党を含めて永田町の連中１００人が１００人、何とか真理教でしょ」

平井「えぇ」

水島「利権でやっているから、正直、言って、あと先のことを考えていないんだね」

平井「そうです、あのう…」

藤「未だ利権ならいいですけど、内部に沁みいっていませんか」

平井「だから役人は多分、上がやるって言うから、そうでしょうけれど、それをやれって言っている連中が金目当てでやっていますからね、あれは稼業ですからね」

石井「２０１５年に取材したんですけれど、再エネによって投資が２兆円があったと。その内、１兆円が国内に落ちたって自慢気に言ったんですけれども、それって正しい事なのかなって思いましたし、１兆円をチューチューしている人が居る訳ですよねぇ。ちょっと不気味ですよね」

平井「だって再エネ賦課金だけでも確か２～３兆円がチューチューされて、中国に還流されているって言っていますもんね」

石井「そこまで、僕はいかないと思うんです」

平井「そこまでいっていない、うん」

石井「外資が２割ぐらいと言われているんですけどね」

水島「それだって、やっぱりねぇ…」

石井「でも６千円、１兆、行っちゃいますもんね。実は統計が無いんですよ。出してくれと言っているんですけど、無いんですよ、外資…」

藤「パネルって、あれ意外と安いからそんなにいっていないよね」

石井「あぁ、そのあとですよね」

藤「あぁ」

石井「あの賦課金の方ですね」

藤「だから殆ど行っていないでしょ」

水島「川口さん。川口さん」

川口「はい」

水島「今、半導体の水と電気の問題でね、ＡＩは一番、エネルギーを使う分野になっているんですけど。ドイツはその辺のＡＩ産業の状態はどんな感じですか。原発やっていないと…」

川口「えーとねぇ、半導体の工場誘致で、私は今、数字が頭にないんですけど、何か膨大な補助金を出して誘致したんですけれど、結局、それは逃げられましたね。それで、それを誘致しようと思って膨大な金額のお金を出してしまった」

水島「まぁ、補助金みたいなね」

川口「ハーベック経済機構保護大臣が凄く非難されていましたけれど、でもね、そういう話って今、あっちこっちにあって色々誘致しようと思って、お金をやっても結局、全部、撤退まではいかなくても、ちょっと延期しますと言って逃げられたり、結局、延期しても多分、もう、やらなくなっちゃうんじゃないかなぁと思われる事業とかそういうのが沢山あって、だって、いくらなんでもドイツみたいにエネルギーの高い所に…」

水島「そりゃそうだね」

川口「どんなに補助を出しても来ないですよ」

水島「いやいや全くその通りで」

川口「だから、そこら辺、根本的に改めてからじゃないと、空洞化が進むばかりですね」

水島「う～ん、だから、それをちゃんとドイツの先例があるんだから、日本も学ばなきゃいけないんだよね、その前例は上手くいかないって。だから、普通、私も、いつもずぅっと聞いていたんだけど、電気と水が必要で、やっぱり電気は大量に安くなきゃ駄目だっていうのにね、北海道は日本の中で一番、高いしね。日常的な電気だけでも今、目いっぱいで、いつ壊れても大停電が起きてもおかしくないって言われている、そういう状態のところで、あぁいうことをやるっていうのは、本当に…」

藤「北海道でしょう」

水島「うん」

藤「本当、もう、ちょっと…」

水島「もう夢物語ですよね」

藤「想像つかないです。本当に危ないです」

水島「うん。だから、その政治家のねぇ、今、公明党の話が出たけどね、やっぱり、あそこでやっているのは自民党と公明党ですよ。それが本当に、ちゃんとやっていないっていうのは、平井さんが言った通りでねぇ、他の部分は、みんな、そうなんだよね」

平井「そうですよね」

水島「うん。レポートして貰ったのは、さっきも言ったけど、何故、釧路湿原に２０万枚もね…」

平井「パネルをね」

水島「太陽光パネルなのかと。だから冬の間は、もう全部、駄目ですよ」

平井「駄目です」

水島「秋になって霜が降り始めたら、もう駄目でしょ」

平井「うん、そうです」

水島「なんで、そんなの、あんなに立てて…」

平井「あれねぇ、水島さん、実は、僕の認識では、あの悪夢の民主党の菅直人内閣が、太陽光発電所を建築基準法の工作物から外すっていう通達を出したんですよ」

水島「あぁ、そうだったんだ、ほぉ〜」

平井「そうなんです。通達を出して、だから、それで建築基準法から外れちゃっているから、何処でも造っているんですよ」

藤「未だ改正されていないんですか」

石井「２０１５年に改正されました」

藤「やっと改正されたんですか。でも最初の３年間か４年間でわぁ〜っと造っちゃっていますからね」

石井「だから最初の時は、どの所有者かの表示さえ無いんですよ」

平井「そう。そうそう、そう」

石井「ただ天罰を喰らってって言っちゃいけないんですけど、今、太陽光の銅線が、狙われているそうです（笑）」

平井「そうそう、そう（笑）」

石井「外国人窃盗ですね（笑）」

一同「（笑）」

藤「うん、前からそうだけどねぇ」

石井「天罰って言っちゃあ、悪いかもしれないけども」

水島「ほんと、そうですね。皆さん、ちょっと、今、世界のトランプ政治から今の身近なこういうことまで含めて（苦笑）」

一同「（苦笑）」

水島「いや、でも日本は本当に大丈夫かなっていう思いがあると思いますけども、理想的なことも含めて今、我々に出来ること、例え石破さんであってもね、まぁ、辞めさせるのが一番、いいと思いますけど」

藤「（笑）」

水島「本当にそれが出来る、ある程度までの常識がある政治家が出てきたら何が出来る、一応、理想のエネルギー政策で、これは、これとこのぐらいで出来るとかね、具体的にも先程、言った水力の問題も含めて議論してみたいと思いますので、宜しくお願いします。一回、お休みします」

一同「(礼)」

＜後半＞

水島「後半になりました。この問題ですね、いつも言うと、この討論、絶望的な気持ちになるばっかりで、もうちょっと元気になることも少し言って貰いたい。中々言い難いところもあるかも分からないけど、それでも我々は希望を持って絶対に諦めないと。滅びるまで諦めない。命が果てる迄は諦めないというようなつもりで…」

一同「(苦笑)」

水島「私も前に悪口で『絶望の伝道師』とか言われちゃって」

一同「(笑)」

水島「ずぅっと絶望が足りないって言ったんですよ」

一同「あぁ～」

水島「日本人には絶望が足りないって言っていたんだけども」

藤「あぁ、そういうのは解かります」

水島「それは足りないかも分からないけども、でも誰かやる人が一人でも居たら、日本は諦めないっていう形で考えたいと思います（苦笑)。竹村さんは水のことについてはね、そういう意味では建設的な提案を前にお聞きしたことがあるんだけど、色んな事もあるので、それぞれ、皆さん、政治家が駄目だとか、勿論、そういう条件があります。

根性が無いとか利権に弱いとかね、でも、それは一応、置いておいて、もしかしたらやる気のある人が一人でも二人でも居た、こういう案を出すっていうことも一つの力になりますから、竹村さんから日本のエネルギー政策のね、一種のエネルギー安保ですよね。その一つの一環になる事を提案戴ければと思います」

竹村「有難うございます。この図は、もう電事連（電気事業連合会）が３．１１以降、隠しちゃっていますけど、３．１１以前に出していた電事連のデータです。これでいくと原子力が圧倒的に安いんですよね。これが原子力で、これが石炭。これが火力で、ＬＧＮ火力。これは水力で、水力は圧倒的に高いんですよ」

水島「うん」

竹村「だから、これは、もう、みんな、各電力会社全て、ダム屋さんを追い出しちゃいました」

水島「あぁ」

竹村「全ての電力会社が、ダムは要らないということで出ちゃいました。もう居ません。じゃあ、一体、本当に高いのは高いんですけど、このグリーンは何かと言うと、資源代、資源のエネルギー代ですね。グリーンが」

水島「うん」

竹村「水は永遠に、ただですよ。確かにインフラ投資の初期投資は高いんです。ですから初期投資は高いけど、あとは永遠にただですよ。それを解って貰いたいっていうことと、今のＣＥＯは何かって言うと、自分の生きている間のせいぜい５年間に成果が出なきゃ、絶対に駄目なんです。例えば、黒四のやったように世銀から借りて５０年ぐらいに成果が出ればいいと。２０年で返せるかどうか分かんないと、３０年で返せるか分かんないっていう先輩達がやったやつが今、日本を救っているんです。

だから、もし今のＣＥＯ達に成果が出て大儲けするのは２０年後ですよと言ったら、彼らは絶対にやらないです。自分が死んだあとじゃないかと。死んだあとのことに、何故、俺が、そんなことをやらなきゃいけないんだということで、そういう概念が今、非常に解り易く言いましたけど、そういうことで全部、水力はパァにされちゃいました」

水島「うん」

竹村「それで電源開発促進法という法律があったんですけど、それも経産省は廃止しちゃいました。電源開発促進法ですよ。せっかく作った法律を廃止するなんていうのは普通、いつかは役に立つと思って、どうにか殺さずに残しておくんですけどね」

水島「うん」

竹村「ところが殺しちゃったんですね。ですから僕は水力が今、日本で全く評価されないで忘れ去られちゃったという状況の中で、水力はいいんだよっていうことを言わなきゃいけないので、今日はお話しさせて戴きます。じゃあ、竹村は、これから水力が出来るのかという話ですけど、要するに、これは嵩上げです。これはダムの嵩上げのイメージですけど、ダムっていうのは、ダムの上の方に行くと広がっているんですよ」

水島「うん」

竹村「だからワイングラスの上が広がっているのと同じように、物凄く広がっているんです。ですから、ちょっと嵩上げすると大きな価値があるんです。それを、もう少し具体的に言うと、日本では、既に２０個以上のダムの嵩上げの実例があります。ダムの嵩上げの技術は日本が世界でオンリーワンです。というのは、国交省は宣伝が下手なのでやっていませんけど、もうダムを簡単に造れませんから、治水をやる為にダムを嵩上げしなきゃ。

だから、それを嵩上げしようということで世界に先駆けて、もう２０個の嵩上げやっているんです。この嵩上げは、いつか電力に使えます。今は治水でやろうと。治水の代替案はあるんですよ。堤防とか湧水槽とかですね。電力の代替はないので、今、治水で嵩上げをしていますけど、将来１０年後、２０年後の後輩達は必ずエネルギーで使っています。

例えば嵩上げは、そんなに簡単にできるのかって言うと、これは青森県で昔、小さいダムがあって、その小さなダムの前に、でっかいダムを造って、これも嵩上げですよ」

藤「うん」

竹村「これも嵩上げです。これで非常に有効なのは、嵩上げは、もう水没者は居ないんですよ。つまり以前は水没者が居たんですけど、嵩上げっていうのは殆ど無いです。無いことは無いんですけど。これは専門的ですけど、大事な図なので、理解して戴きたいんですけど、ダムの高さ１００メーターが１００％だとしたところで、このグラフでは横の軸がダムの貯留量です。高さが１００の時に貯留量が１００になりますよという、そりゃそうですね。

だからカーブを上に行って、カーブが横になっているんです。つまり上に行けば行く程、横に寝ているよっていうのがダムの傾向です。これを１０％、嵩上げすると、どうなるかって言うと、こうです。ダムの高さを１０％あげると、ずずずぅ～っと横に行きまして、ダムの貯留量が、あの白になるんです。それでここが増えちゃうんです。倍になっちゃうんです」

水島「うん」

竹村「１０％嵩上げすることによって、ダムの貯留量は倍になるんです。電力はどうかって言うと数倍になります。何故かと言うと、今、電力の水力発電は、ここのところで水力というのは水位を下げちゃいけないので、水位を下げたらポテンシャルが無くなっちゃうんで、せいぜい、この辺でゴチョゴチョ、発電しているんです。

入って来る水を前提として、ここで発電しているんですけど、嵩上げすることによって、この高さのポテンシャルで、この全体が使えるんです。試算すると、あるダムなんかは、１０倍になっちゃいますね。１０％嵩上げすることによって水力発電が今の発電の１０倍になっちゃうんです。そういう上手いダムは少ないんですけど、今、日本には３千個のダムがあります。日本はダム王国ですけど、それは平安時代、その前の弥生時代、縄文とは言わないけれども弥生時代からダムを造っていますので、日本は１０日間、１週間、お天気があると雨は全部、海に戻っちゃいますので、どうしても、水を貯めなきゃいけない文明だったんですね。

だから僕達がダムと言う以前に、溜池ということで満濃池とか佐山池とか、今でも物凄く現役で生きているんですよ。そういう溜池がある、ダムがある日本で昔、造ったダムは確かに危ういんですけど、嵩上げすることによって、もう水没は無い。自然環境にインパクトも無い。何も無いんです。だから要は工事費だけです。これで大きなポテンシャルが出来るので、私はダムを３つ造りましたけど、僕が作ったダムは将来の後輩達が造る基礎を造ったと、僕は最近、そう思っている。

だから、自分が作ったダムは３つありますけど、それは、いつか嵩上げしてくれと。どうぞ嵩上げしてくれと。そして、これは、矢木沢ダムってアーチダムです。僕もダムを、河内ダムっていう所でアーチダムを作ったんですけど、アーチダムは嵩上げできるのかと、できるんです。アーチダムの前に、こういう山をコンクリートで造ればいいんです。要はセメント量の少ないコンクリートで、完全自動化の機械化施工で、人間が誰も居なくてもダムは今、出来ますので、今、秋田県の成瀬ダムという所で鹿島建設が完全自動化で造っています。人が居ない所で。

ですからアーチダムの力を、アーチでもっている前に山を造って、そして、それが嵩上げです。別にアーチダムそのものを嵩上げする必要が無いんです。というような技術が出来

ますので、こんなの世界で誰もやったことないですけど、日本は出来るんです。それで日本の既存のダムが将来の物凄い財産になるということを是非、知って貰いたいなということなので…」

水島「途中でいいですか」

竹村「はい、どうぞ」

水島「それで、その嵩上げをして、水量が増えますよね」

竹村「はい」

水島「１０倍ぐらいになるので」

竹村「えぇ」

水島「これは、私が理屈を解っていないのかも分かんないけど、電力量が、それで極端に上がるっていうのは、どういう発電機があってというのはあるんで…」

竹村「あのねぇ、この図で、もう一回、説明しますね」

水島「うん」

竹村「これは非常に専門的で申し訳ないんですけど、水力発電は高さと水量で決まるんです。それで高さを下げちゃったら、エネルギーが無くなっちゃうので、発電のダムは下げられないんです」

水島「はい」

竹村「高い所で運用しているんです」

水島「うん」

竹村「ダムに入って来る量を発電で使っているんです。ですから水力発電のダムは高さを維持しながら、流域から入って来る水を落として発電しているんですけど、嵩上げすることによって高さのポテンシャルを下げないで、同じ高さで今度はこの量が使えるんですよ」

水島「あぁ」

竹村「入って来る量。雨でチョロチョロ入って来る量じゃなくて、貯めちゃった量で出来る訳です。これは別に私がトリックで言うんじゃなくて本当の話なので、ですから、嵩上げすることによって、ダムの貯留量は２倍以上になる。水力発電の発電力は、私は数倍になると思っています。

ですから、これから、もしＡＩで本当に電気、水が必要になって来るとしたら、日本が一番、恵まれているんです。ダム王国で全ての流域に今、ダムがあります。無い流域はありません。小さな川は別ですけど」

水島「うん」

竹村「歴史的にも造って来ましたので、その昔のダムを嵩上げすることによって、水没者

が居ない、自然関係にもインパクトを与えない、大きなエネルギー宝庫が日本にあるんです。ということを知って戴きたい。もっと極端なことを言うと、例の黒四がありますよね。黒四はきれいなアーチダムで観光にいいんですが、あれも嵩上げすればいいんですよ。将来５０年もあれば、後輩達が嵩上げすると思いますよ」

水島「うん」

竹村「エネルギーは大事ですから」

水島「うん」

竹村「環境と観光より、観点は、エネルギーは大事だと思ったら、彼ら嵩上げしちゃうと思いますね」

水島「うん。例えば、これをお聞きして思ったんだけど、一つ、実例をちゃんとやれば、あそこも出来るな、ここも出来るようになってくるじゃないですか。そういう意味では、今、予算を組んでやらなきゃいけないんだけども、例えば一つ、例を挙げると、私は静岡県だから井川ダムとか色々あるじゃないですか。それを嵩上げするのに、どれぐらい費用がかかって、どのぐらいの電力量とかね、黒四でもいいんですけども、あそこは工事が中々大変だと思うんだけど、そういうのは、どうでしょうね」

竹村「一番、身近で八ッ場ダムっていうですねぇ…」

水島「八ッ場ってありますねぇ」

竹村「あの有名な５千億で高いって言われたダムです」

水島「はい」

竹村「５千億の内、３千億が補償です」

水島「あぁ、そうですか」

竹村「付け替え道路とか付け替え鉄道とか、それで２千億が色んな経費であって、実質工費は１千億ぐらいです」

水島「あぁ、あぁ～」

竹村「ダムの工事なんか安いもんです。その一番大切なのが、その水没するコミュニティを失ってしまうってことに対するアテンドが、やはり非常に予算がかかるんです。時間と予算が」

水島「ただ、今は意外と過疎になっているから、意外とそういうのは少ないでしょうね」

竹村「えぇ」

水島「補償っていうのはねぇ」

竹村「あぁ、これからは少ないと思います。だから補償は少ないからいいっていう訳じゃないんですけど、私は、今あるダムが将来の為の基礎だと。基礎を造ったと思ってくれということを、今、国交省は治水という名目で、実は着々とやっています」

水島「やっているんですか」

竹村「やっているんです、やっているんです」

水島「あぁ」

竹村「彼らは未だ自分の所管法律で電気、エネルギーが無いんで、治水だって言っていますけど、結果的にエネルギーは増えています」

水島「なるほど」

竹村「増えるような方向になっています」

水島「うん。まぁ、それは大変、良い例になることだと思うんですけど、だから、そこんところ、本当に一つ一つ、今言った水力のね、それこそ電力の嵩上げということが出来ればね、それこそ自然エネルギーですから。もう一つ言い方があるのは、よく誤解されると思うのは、太陽光パネルだって太陽が当たって、太陽の光は、ただなんだよって、よく言うじゃないですか。だから、この水だって同じじゃないのというような言い方、まぁ、敢えて言っているんですけど、どうですか」

竹村「はい。水というのは、実は日本人だけが、これ程ただで享受できる、ドイツは出来ないですよ。あのどろんとした、どよよぉんとした川が流れたってエネルギーじゃないんですよ」

水島「うん、うん、そうですね」

竹村「可哀想です。日本は流れているっていうことはエネルギーですね」

水島「うん」

竹村「ですから太陽光、風力は、さっき言ったように対面積当たりのエネルギーが非常に薄いので、それを集めるのに必死になっていますけど、日本列島そのものが雨を集めてくれるんですよ」

水島「集積所みたいにね」

竹村「えぇ」

水島「うん」

竹村「ですから、私は日本だけが持っている最高の優れた手法だと思いますね。これは、やっぱり神様が与えてくれた我が国だと、僕は思っています」

水島「もう、ちょっと凄い素人質問で申し訳ないんだけど、嵩上げしますよね」

竹村「うん」

水島「水は満杯の場合はいいかも分かんないけど、雨が降らないとか色々状況があるじゃないですか」

竹村「えぇ、えぇ」

水島「これは、どうですか」

竹村「まぁ、これは、しょうがないですね。今でもダムが空になる時があります。大渇水になって、その時はその時で水を供給する会社が動きます。だから水力だけでやれるとは思いません」

水島「うん」

竹村「東京や横浜を水力でいくのは出来ません」

水島「なるほど」

竹村「やっぱり、もっとデカい所から一気にやんなきゃいけない。僕の狙っているのは、大都市は、この画ならいいんですね。この画を見て戴きたいんです。この画のイメージがこれですね。今、９電力が全部、仕切っていますけど、大都市は違った形で投入しなきゃ駄目です。水力がいけるのは、地方都市、中核都市、山村、過疎地域、そういう所が、実は、自立した水力でいけると」

水島「うん」

竹村「大きい火力発電、または原子力というものとの組み合わせですよね」

水島「うん」

竹村「組み合わせが必要だと思っている。だから水力だけでいけるとは考えていません。以前、小泉総理は、私の本を振りかざして、テレビで竹村さんは水力だけでいけるんだって言っていると言ったんです。僕はあの人と会ったことがないんですけど、それは嘘です。水力だけじゃあ、出来ないんです」

水島「そりゃそうですね」

竹村「水力と他の電力とのバランスが必要です」

一同「うん」

竹村「ですから、それは是非、解って戴きたいなと思っていますね」

水島「なるほど」

石井「３０年後ぐらいには水力ときれいに組み合わせられますよね」

竹村「えぇ。要は水力っていうのはバッテリーですからね、自然のバッテリーですから」

水島「はい。なるほど。こういうことですけど、皆さん、他のっていうかな、それぞれのエネルギー案はどうですか」

藤「あぁ、さっき、杉山さんが言った、アメリカから原油を買うっていうのは、僕は一番、いいと思っているんですよ」

水島「うん、それは安定的だっていうことでね」

藤「一番、Availabilityがあるし即効性があると思っていて、さっき杉山さんが、日本の石油供給の中東依存度９割以上って言いましたけど、今、この半年間で９６％から下がったことがないです」

水島「あぁ、そう」

藤「はい」

水島「あぁ～、じゃあ、やっぱり変わんないんだ」

藤「もう下がりようが無いです、上がる事があっても」

水島「うん」

藤「あと、今、Drill Baby, Drill とか言っているんですけど、もうアメリカの原油って増えないです。いくら規制緩和をしても。今、取り敢えずは」

水島「え、埋蔵量の問題ですか」

藤「はい？」

水島「増えないっていうのは？」

藤「埋蔵量も大分ねぇ、あのパーミヤンって、シェルの一番の産地があったんですけど、ここの一番、いい所が大分、無くなってきたし、今、大体、日糧１３５０万バレルですからサウジとかロシアの１.５倍ぐらい」

水島「うん」

藤「多分、もう、この１～２年、ずぅ～っと横這いで、増えても殆ど増えないんですが、ただ一日あたり、もう４００万バレル以上、輸出していますから、それを少し買うだけでも、大体、日本って今、もう１日あたりの消費量が２５０万ぐらいですから、中東依存度が２割３割は圧倒的に下がるんですね。しかも、あまりメディアが言っていないんですけど、アメリカの原油って生産調整していないから、実は安いんです」

水島「うん、あぁ、そうなんですか」

藤「中東の石油っていうのは今、サウジ含めて減産していますから、高いんです。常時、バレルあたり大体５ドル以上、実は中東の方が高いんです」

水島「あぁ」

藤「だから中東はこの間、日本向けのあれを下げたと言っても１バレル７９ドルでＷＴＩは７０です」

水島「あぁ～」

藤「っていうか、もう７０切って、もう６８とか、だから１０ドルぐらい違う時があるんですよ」

水島「うん」

藤「ですから本当は、韓国なんか、それで結構、安いからって言って買っているんですけど、だから政府が船賃、一部補助しているんですよね」

水島「あぁ～」

藤「だから、どうしても中東に比べたら、まだアメリカの方が少し遠いので、安全保障は、さっき杉山さんがおっしゃったように、第７艦隊が守ってくれるようにすれば」

水島「うん」

藤「それで少し高いっていうのと、まぁ、それでも価格が１０ドル違ったら…」

水島「うん。違うよね」

藤「絶対、アメリカ産の原油が安いんですけど、ただアメリカの原油って軽油なので軽い油なんですよ」

水島「うん」

藤「だから日本の石油会社って、中東の一番質の悪い原油にoptimizeした処理施設になっているので、買わないんですよね」

水島「あぁ、そうか、その精製の為の設備が違うんだ」

藤「だから、それについては少し融資くらいしてやって設備調整をするとか、最初の段階で、少し工事をすればいいと思っているんですけど、結局、さっき言ったように化石燃料でも、まだＬＮＧとか天然ガスは一番、ＣＯ２出さないですよね」

水島「うん」

藤「石炭も石油、その安全保障、安全供給安全保障、あり得ないと。終わったコンテンツにケアする必要は無いっていうことで、それすら、やらないので」

水島「なるほど」

藤「だから本来、この間、日米首脳会談で、アラスカの１０年なのか２０年先か判らない、しかも値段が安いかどうか判らないＬＮＧで何となくディールとかやりましたけど」

水島「あれ、凄いね」

藤「アメリカの石油を買えばいいし、今回、それからカナダに対して１０％の関税をかけましたから、これからカナダの石油も余っちゃうんですよ。しかもカナダの石油は中東と同じように重い油ですよ」

水島「都合がいいんだ」

藤「だけど日本の石油会社は中東がいいって言って、カナダのも買わないんですよ」

水島「所謂、エネルギー安保意識っていうのは少ないのかな。普通は常識で考えて、分散型の方がいいじゃないですか」

藤「いや、だから、もう、いや、いや、もう普通の人から見たら、中東依存度が９６ですって言ったら嘘だろって」

水島「それは何か恐ろしいでしょう」

藤「嘘だろと」

水島「戦争でも起きたら」

藤「No Kiddingの世界ですから」

水島「う～ん…」

藤「しかも、それは結果的に、これに対する日本の元売り会社、今、殆ど２社、３社になっちゃいましたから、これまでずぅ～っと先輩達がやってきたオペレーションを変えたくないからと言って、今、結果的に割高になった中東の原油を、しかも非常に危ない形で入れていて、だから少し本来なら産業政策でやるべきですけど、何度も言うように、終わったコンテンツだろうと」

水島「う～ん」

藤「そんなものに、どうして政府が介入するんだっていう話になっていて、私は、これ、非常にコスパがいいと思っているんですけど、そうすれば…」

水島「そうだね、うん」

藤「圧倒的に中東依存度が下がりますし、関税の問題だって、アメリカから原油を買えば、貿易赤字に相当、即効性がありますから」

水島「そうだよね」

藤「やることは明日でも出来るのに、やろうとしていないっていうところに…」

水島「それ、何か対中東的に問題があるところってありますか」

藤「これねぇ、結構、中東関係のセンターの方がいらっしゃるんですよね」

水島「うん」

藤「みんな、日本人の悪いところで、中東と長いこと、お付き合いしているからとか」

水島「あぁ、そういう感じですか」

藤「中東を先に減らしちゃいけないんじゃないかって、そういう人間関係とか過去の関係で中東から買わなきゃいけないっていう人達が…」

水島「なるほどね」

藤「利権じゃないにしても多分、Good Willでね、思っている人が居るんですけど…」

水島「なるほどね」

藤「だから、逆に言うと、アメリカの原油を買ったらいいんじゃないかっていう団体も居ないし、元売りは、みんな、中東ですから。だけど、物凄く、ここをちょっと押せば直ぐ１００万バレルぐらい買えば、しかも今、中国が貿易摩擦の影響でアメリカの原油を買わなくなっていますから、だから、逆に今、インドがロシアと変わって、アメリカの原油を買い出していますから、そういう原油を買えば…」

水島「トランプさんはモディさんと仲いいよね」

藤「だから、もうトランプからすれば、日本はThank You Very Much, Mr. Ishibaになるんですけど、それを、この間、何か訳の判らないアラスカのＬＮＧとか言って、う～ん」

水島「あれは開発でしょ」

藤「はい？」

水島「実際、開発なんでしょ、まだ…」

藤「いや、もう早くても１０年先ですよね」

水島「でしょう。だから…」

藤「あと、巨大な２００キロ以上のパイプラインを引かなきゃいけないし、そんなことは出来るかっていう話で…」

水島「ほんと、サハリンの方がいいよね」

藤「だから、ほんとにアメリカの原油を買えって杉山さんが言ってくれたから、意を継いで言いましたけど」

水島「いや、でも、それは…」

藤「本当に簡単な話で」

水島「非常にリアルな話だし、政治的にもいいんじゃないですか」

藤「物凄く一石何鳥かしますけど、いいんですよ」

水島「貿易赤字の」

藤「はい」

水島「武器を買うだけじゃなくて、石油も買ってね」

藤「うん」

水島「まぁ、それは全面的にねぇ」

藤「もう、そうなると、多分、相互関税みたいなのも吹っ飛ぶと思うんですけど」

水島「そうだよねぇ」

藤「だけど何度も言うようですけど、この化石燃料は悪。まだギリギリ天然ガスは許せても…」

水島「あぁ～、そうかぁ」

藤「だって石炭なんて、まさしくＣＯＰ２１当たりで風当たり強くなってから、日本の総合商社が全部、海外の石炭権益を売っちゃいましたからね」

水島「本当に馬鹿だね。ほんとねぇ」

藤「だから本当に、実は物凄く問題が起きているんですけど、そこでトランプさんがやめてくれて、何とか日本もアメリカのコバンザメのようにそっちの方に行ってくれれば、そういう問題も一気に解消できると思うんですけど」

水島「そうだね」

藤「最後になりますけど、やはり日本の中堅官僚、経産省の官僚は摺り込みが激しくて」

水島「あぁ～」

藤「だからガソリン補助金もやめた方がいいっていうのはあるんですけど、その代わり、再エネに更にお金、入れろとかって言っていますから」

水島「はぁ～～っ、ねぇ、ほんとうに」

藤「えぇ…」

水島「いや、でも本当に現実的な対応、今、アメリカとの関係とかを考えても、外交的にもプラスになる話ですよね」

藤「うん、だから１０年ぐらい前に日米の貿易協定ＦＴＡの時も、シェールオイルを買わないかっていう話があったんですけど、日本がバァーっと猛反対したので、最近、アメリカは言わなくもなっちゃいましたね。だから、もったいないです」

水島「例えば、今、９６％頼っている中東の原油を、まず、最初は２割ぐらいね、アメリカから買い付け始めて段々と半々にしていく、それから段々、こっちへ替えていくっていうことをね」

藤「えぇ。そうすれば中東だって日本の足元を見ていますから、物凄く高い値段で、石油を売っていますから」

水島「うん」

藤「今、１０ドルぐらい違いますから」

水島「うん。それだって交渉できますよね」

藤「はい」

水島「相手が出来ればねぇ」

藤「うん」

水島「はい、これは非常にねぇ、できることじゃないかっていう気がしますけれどね」

藤「極めて簡単な話ですけど、やっぱり何度も言いますけど、石油はオワコンだから」

水島「あぁ、そういう意識が、でも、これで変わりますよね」

藤「だから、もうパリ協定の呪縛っていうのが、本当に色んなところに染み渡っちゃっていて…」

水島「トランプになればいいんだよね。石破は無理だろうけども、まぁね（失笑）」

藤「すみません（苦笑）」

水島「でもエネルギー政策としては、非常に現実的な対応じゃないですか」

藤「一番、問題の部分を、本当にインサートに解決できるんですけど」

水島「そうだよね」

藤「うん、だから、それが…」

水島「それが出来ないのかっていうことだよねぇ」

石井「安全保障ですよね」

藤「えぇえぇ、えぇ」

水島「そうそう。平井さんは、どうですか」

平井「そうですね、私も考えていたのは、やはりアメリカからエネルギーを買って来ると。それから再エネっていうのを全部、やめて、火力発電とか、それから今、お話があった水力発電ですよねぇ。こういったものを組み合わせていくっていうのが正解かなぁと思っているんです。そこでは、やはり竹村先生がおっしゃったように、２０年先に儲かるものをやれるかっていうのがあるんですけど、これは株主資本主義っていうものを見直さなきゃいけないですよね」

水島「あぁ、そうだね」

平井「今の経営者ってアメリカ型のものを導入されて、結局、もう長期投資とか、ものになるか、ならないかとか、そういう技術を投資しないと。従業員は、とにかく、なるべく非正規にして変動費にして、なるべく短期で利益を稼ぐ」

水島「コストカットですからね」

平井「そして、それを株主に１円でも多く配当した経営者が偉い経営者だと。それで株主と会社との契約とか言って、昔、日本が強かった頃は、億以上のお金を取る経営者なんて居なかったですよ」

水島「はい」

平井「それが今、もう本当に自分のことだけ考えて、会社のことは考えないで、会社も、もう１０年先に無くなったって構わないと。今、とにかく株主に沢山、配当して、そして日本経済新聞に名経営者と書いて貰って（笑）」

一同「（笑）」

平井「そして（笑）会社との経営で、自分は２億円とか３億円とか年俸を貰えばいいわと。そういうような連中が、経団連とか同友会にウヨウヨ居るから駄目なんですよね。だから、ここのところも本当は変えていかなきゃいけないんです。何故、日本の経済が駄目になったかって言うと、所謂、今の財界リーダーっていうのがＦランクラスだからです、はっきり言うとね。だから駄目ですよ。だって、それだったら、少しでも国民の生活を豊かにしてみろと、３０年間、給料も上がらないような経営していてね、自分達は億の報酬を貰って、何を胸張っているんですかという風に思う訳ですよ」

水島「いや、全くねぇ。それは真っ当な意見なんだよね」

平井「(笑)」

水島「ほんと、そうなんだよ」

平井「そうですよね」

水島「経団連に実行する奴が、居ないっていうね」

平井「そうなんですよ」

水島「うん」

平井「だから僕は、居るのかなって思っているんです」

水島「居てくれりゃあいいけどね」

平井「経団連とかね。それで成れの果てが、これですよ」

水島「うん」

平井「ねぇ。この画像を見て下さい。これ、何をやっているかって言ったら、２月に中国へ２３０人ぐらいの経営者が行って、中国詣をやっているんです」

水島「あぁ」

平井「また、この真ん中の人、これは誰かというと新日鉄の前の会長、今の相談役の新藤さんですよ。それでね、中国へ行ったら、あんな風に握手してね、何故、ＵＳスチールを売っておられるんですか」

藤「しかも副首相にしか会えないんですよ」

平井「そうでしょう」

藤「これまでは大体、首相だったのに、今回は副首相どまりでしたから」

平井「そう」

藤「ほんと、舐められていますよ」

平井「舐められている訳ですよ。それで握手しているのは、これは多分、経団連の会長でしょう」

水島「あぁ」

平井「こんなことをやっている経営者だから、はっきり言って日本は低迷するんですよ」

水島「まぁ、その通りですね」

平井「この程度のものだから」

藤「この写真も本当に恥ですよ」

平井「恥ですよね」

水島「扱われ方で、はっきり解りますね」

平井「解りますよねぇ」

水島「うん」

平井「だからねぇ、こうやって、こうなって得意満面になっている写真が出ていますけど、これが何なんですかっていう話です、本当に」

水島「いや…」

平井「これが現実ですよね。だから私自身は本当に、こういったところから直していかないと、エネルギーの話から横に逸れちゃいましたけど、こういったことから直していかないと、日本の再生って難しいだろうなぁと思っています」

水島「うん。そうですねぇ。だから、ある意味で言うとね、今、平井さんが言ったことは、結構、真っ当なことを言っていて、ただ他の人が見ると、革命家みたいなね、維新のことを言っているように聞こえる可能性もあるんだけどね」

平井「ありますね（笑）」

水島「でも今、真面なことを言うことは大事ですよね」

平井「そうです」

水島「現実主義的な言い方では拙いですよね。そういう人も居ていいんだけどね」

平井「うん。だから変な例えですけど、幕末に近い様な状況にあって、ここに書いていますけど、本当に草莽崛起の時が来たんだと、私は思いますよ」

水島「まぁ、それでないとね」

平井「えぇ」

水島「いや、これね、いつも言いますけど、『諸侯たのむに足らず。公卿たのむに足らず。草莽の志士 糾合義挙の外にはとても策これなき事』諸侯頼みに足らずというね、この上は草莽の志を糾合して立ち上がるしかないっていうね。本当に大名も公家も頼むに足らないというのが今、我々、まざまざ、政治家、メディア、役人とか色々含めて、もうちょっと骨のある人が一人でも二人でも出て来るとね、この番組に出てくれる人は、みんな、そういう色んな思いを持っている方が居てくれるんですけど、そう思いますね。ただ、具体的なことで言うとね、さっき言ったアメリカからの輸入とかね、こういうものはエネルギー安保だけじゃなくて、安全保障とか貿易の関係も含めてプラスに働くということですよね」

平井「えぇ、そう。さっき石井さんがおっしゃっていましたけど、やっぱり原発の活用ですよね」

水島「そうですね」

平井「これも、やらなきゃいけないと思います」

水島「そうですね」

平井「今、水島社長からも話があったんですけど、やはり、今の日本の財界人に欠けているのは、いかに日本の国民を豊かにするかで、日本の国民が一人でも多く豊かになって、幸せな生活を送らせるか、富国強兵ですよ。この発想が全くありませんね」

水島「そうねぇ」

平井「うん」

水島「それと、今言ったように、今の国民をそういう風に幸せにしなきゃいけないし」

平井「えぇ」

水島「それと同時に、竹村さんがさっきおっしゃっていたように、５０年後の子孫達がね…」

平井「そう」

水島「有難う、このプレゼントっていうね」

平井「えぇ」

水島「過去から貰ったと言ったら、やっぱり伝統や文化を大事にするようになりますよ」

平井「そうですよね」

水島「先輩を尊敬出来ればね」

平井「えぇ。私なんか２０代の時にバブルの経験をしていますけどね、やっぱり、これは本当に大正時代の先輩達が本当にやってくれた恩恵を受けている訳であって、その恩恵を受けた我々、まぁ、私も６６歳ですけどね、私と同じような年代の人間が今、財界トップに居る訳ですよね。君達、何を考えているんだと、私は言いたいですね」

水島「その通りですね」

平井「ね」

水島「はい、有難うございます」

平井「はい」

水島「杉山さんは、どうですか。さっきもチラッとおっしゃっていたけど」

杉山「地政学的な観点から言うと、台湾とか中国とかキナ臭い所にあって何か揉めだすと、当然、日本のシーレーンっていうのは中国が狙う訳ですよ」

水島「海軍は、もう完全に、そうやって意識してつくっていますね。はい」

杉山「そういう時に、じゃあ、まぁ、当然、アメリカから買っておくっていうのもあるんだけど、備蓄はどうなんだって言うと、石油は２００日分あるって言うけど地上にタンクが並んでいるだけなので簡単に壊させるし、ガスや石炭はひと月分も無いし、それから、原子力は本当にきちんと稼働していれば、国内にある装荷前の燃料とかも含めれば、この３年間、稼働し続けられるんですよね。この安全保障上の意義って凄く大きくて、全く燃料が入って来なくなっても３年間、回り続ける訳でね」

水島「うん、３年間、何とか出来れば」

杉山「さっきテロがあるか知らんから止めるとか言っているけど、止めている事のリスクの大きさっていうのを、もっと噛み締めないといけないですよ」

水島「そうですね」

杉山「原発は、みんな、回っていれば日本の電力の２割は絶えず、例えば、３年間、海が封鎖されても発電出来るって、これは凄く大きいですよね」

水島「うん」

杉山「まぁ、これが一つ、だけど、これが化石燃料の方の備蓄は強化しなきゃいけないし、それのテロ対策、まぁ、ミサイル対策とかもあるんでしょうけど、そういうのも、きちんとやらなきゃいけなくて、原子力だけのテロ対策をやっても意味が無い訳ですよ」

水島「うん」

杉山「もっと Easy Target が、いっぱいある訳ですからね」

水島「はい、そうですね」

杉山「これが一つと、あと、トランプ政権が今、ウクライナでやろうとしていることは、ロシアとは交渉可能だと。ロシアは西側に引き戻すと。まぁ、Ｇ８にするっていう言葉が出ているぐらいですよ」

水島「うん」

杉山「実際、そうですよね。ウクライナ、あれはロシアの勢力圏ですよと認めて中立化すればロシアもそれを望んでいる訳で、それ以上、ヨーロッパに入り込んで来るとかっていうのは結構、妄想の類いでね」

水島「うん」

杉山「あの大戦略を考えたら当然、ロシアと中国を引き離すっていうのが、西側全ての国にとって最も重要な課題でね」

水島「その通りですね」

杉山「それを目指しているんだと思うんですよ。だから北海道のエネルギーの話になっているけど、ロシアからパイプラインでガスを買うって、これをやったら凄く安い電気が供給できますからね」

水島「そりゃそうですね。はい」

杉山「北海道の太陽やら風力やら電気代が上がるばっかりのものは、みんな、やめて」

水島「やめた方がいい」

杉山「今、もう原発もあるし、火力発電所もあるんだから、それをフル稼働すると。それでも足りなければ火力発電所を建てると。そういったことをやれば、北海道だって充分、電気代が安くなる訳ですよ」

水島「うん」

杉山「もう一つ、かつて日本が大東亜共栄圏を目指した理由は、資源が無いからですよね。石油はオランダ迄、取りに行かなきゃいけなかったし、ゴムはマレーシアまで行かなきゃいけなかったしと。まぁ、そこは、もう日本は宿命ですけど、その大東亜共栄圏に代わる今のコンセプトが、開かれたインド太平洋ですよね」

水島「うん」

杉山「これとねぇ、あのエネルギー・ドミナンスってアメリカが言っているものの親和性が凄く高くて、あのエネルギー・ドミナンスってアメリカが言う時に、同盟国や友好国にもエネルギーを供給して、まぁ、中国のことですけど潜在的な敵に負けないようにするっていうコンセプトが入っているので」

水島「うん、うん」

杉山「だから、そのエネルギー・ドミナンスっていうものをインド太平洋でやるんだということになれば、日本へのエネルギーの安定供給ってのは、だから日本は戦争して大東亜共栄圏、勝ち取らなくても、その開かれたインド太平洋の中で資源へのアクセスがきちんと出来ると」

水島「うん」

杉山「なにしろ安倍首相のコンセプトですから、そのぐらいのことを言ってエネルギー・ドミナンスを日本もやるぞと言って立ち上がればいいと思うんですけどね」

水島「そうですね。それとね、今、その通りだと思うんですけど、もう一つ、ちょっと、前にエネルギーっていうところで出たと思うんですけど、日本周辺の海洋資源が結構、あるんじゃないかと。石油とかね…」

杉山「メタンハイドレート」

水島「そうそう。ガスにしろ、レアアースにしろ、まぁ、レアアースはエネルギーとは違うかも分からないけども、こういった色んなものがよく言われるんですけども…」

藤「それは無いです」

水島「無いよね。これは、ちょっと確認しておきたいっていうね。何故、やらないんだっていう言い方をする人が居たんでね」

藤「無いです」

水島「無い。あぁ、じゃあ、言って下さい」

藤「あぁ、採るとしてもコストがもう馬鹿高いです」

水島「うん」

藤「よく尖閣沖のガス田なんていう話があって」

水島「ありましたね」

藤「中国が持って行くと言いますけども、日本に持って来ようと思ったら物凄い高いガスになりますよ」

水島「うん。元経産省の方が言っている訳だから信用しますよ」

藤「いや、だから、経産省、もう、みんなも含めて、問題だ、問題だと言っていますけど、あんなの持って来ようと思ったら、まず、そもそも何処でエネルギー施設にするんですかと」

水島「うん」

藤「もう、ほんと、とんでもない高いガスになりますから」

水島「なるほど」

藤「だから、要はエネルギーの問題って、実は、みんな、メタンハイドレートも含めて色々言いますけども、ありますけど、やっぱり最後はコストですよね」

水島「うん」

藤「今、地球温暖化の問題はコスト度外視して馬鹿な事をやっていますけど、だから、本当に、尖閣諸島って、例えば１９７０年代に国連が物凄い石油があるって言ったじゃないですか。あんなの物凄く荒っぽいペーパー調査みたいなもので、実際は一文の値打ちぐらいしか無かったんですよ」

水島「なるほど」

藤「だから日本は化石燃料って残念ながら無いんですよ」

水島「う～ん。それは凄く大事な話で、これは皆さんの意見としてもいいですか」

杉山「私は資源量としては、そこそこ、あると思うんですけど、ただ、おっしゃるように採掘の技術っていうものが少なくとも今、知られている技術であれば、そんなにいいものが無い。つまり非常にコストがかかるので、経済的ではないですね。ただ…」

水島「少なくとも１０年、２０年を見た時、ペイできない」

杉山「難しいですね。だから資源量があるっていうのはね、それはあるんですよ。世界中に。だけど本当に経済的に採掘出来るものっていうのは中々無いと」

石井「僕も、全くおっしゃる通りです」

水島「じゃあ、その辺は…」

杉山「尖閣の所で掘るとかね、ああいうのは科学調査的なものをして自分の領土領海っていうものは、ここまであるんだぞということを、ちゃんと国際的に示しておくことが大事なので、その限りに於いては、やればいいと思うんですけどね」

水島「うんうん」

藤「そうですね。実際、日本は文句だけ言っていて、やらなかったですからね」

水島「なるほどね」

藤「あと戦前はサハリンが１割、輸入していたんですよ」

水島「うん、うん」

藤「だけど、あれもスターリンに乗っ取られちゃいましたからね。だから本当に原油は、もう本当に日本は悲しい運命です」

水島「もう、そこを、はっきり思い切って割り切って…」

藤「えぇ」

水島「もう少なくとも１０年、２０年の計画では無理だと。周辺でね」

藤「はい」

水島「何か膨大な資源量があるからと言って、何か、どなたかが言っていたんですよ」

杉山「基礎的な技術開発をやるというのはいいと思うんですよ。ひょっとしたら、素晴らしいアイデアで安く掘れるようになるかもしれないので」

水島「あぁ、そういうことが出来るようになるかも…」

杉山「だけど、そんなに何百億円とか何千億円とかをかける話では無い」

藤「だから竹村先生の話では、太陽のエネルギーなんて、もう無尽蔵じゃないですか」

水島「そうですね」

藤「だけどエネルギー密度が低いから中々出来なくて、だから、水っていうのを媒介にしてエネルギー密度を上げるっていう意味では、日本にはメリットがあるっていうことですけど、原油については少なくとも可能性ゼロですね」

水島「なるほどねぇ」

石井「ちょっとネットでメタンハイドレートへの関心が、青山さんは未だ番組を持っているんですよね（笑）」

水島「あぁ、別にいいんですよ」

石井「何か、ちょっとバイアスが掛かっちゃっている感じがしているんです。エネルギーで講演した時、３人ぐらいから必ず質問が来るんです。あれは夢が多い、いいんですけど、否定はしないんですけど、ちょっと変な風に既存メディアが変な方向に行ったと同時にネットメディアも変な方向に行っちゃったかなぁという感じはしないでもない、あ、否定はしないです」

水島「うん。それは一応、前にも抗議を受けた覚えがあってね、一般の人が、いやぁ、メタンハイドレートは難しいと。コストの問題とかね。ただ、いや、そうじゃないんだっていう形で、青山さんの奥様だったかな、出演して貰ってそういうことを説明もしたと。両論併記という形にしたんですけどね」

石井「うん」

水島「やっぱり、確かにそういう意味では、難しいって人が数から言えば多かったです

ね」

石井「と言うか、この１０年の累計で、もう千億を超えちゃったんですよ。まぁ、青山さんの意向があったか判らないですけれども、安倍さんが積極的にやっちゃったと」

水島「うん」

石井「経産省で安倍案件と言われていたと聞いていますけど。今、累計が千億いっちゃったので、そうする…」

藤「何の累計ですか」

石井「あぁ、メタンハイドレート調査と採掘」

藤「絶対に、そんなにかかっていない」

石井「でも、いっているんじゃないですか」

藤「それは、絶対にいっていない」

杉山「だって僕が見ても超えていましたよ」

石井「１０年で」

藤「一千億円？」

杉山「累計で」

藤「あぁ、そうかぁ」

石井「累計、累計、累計」

藤「１０年でないもんね」

石井「年だったら５００億です。そうそう、そう」

藤「２０年位やってるもん」

石井「一千億ぐらい」

藤「じゃあ、毎年５０億だったら石油を何処から入れたのがあるかもしれないね」

石井「もう、そろそろ決めなくちゃいけないかなぁっていう頃だと思いますよ」

水島「なるほどね」

石井「良くも悪くも、さっきアンモニアの名前が出ましたけど、アンモニアは実装されたんですよ。一応ペイするということで、お金の、あぁ、未だ駄目です、絶対駄目です（笑）」

藤「絶対、あれ、だからメタンハイドレートは、地下にあるシャーベット状のメタンハイドレートを取り出す技術まで未だ確立していないですよ」

石井「そこからガスにして、発電まで入れるっていうのが、ちょっと手間がかかるので」

水島「なるほどね」

藤「もっと言っちゃうと、投入するエネルギーの方が取り出すエネルギーよりも多いんじゃないかっていうね」

杉山「そうそう、そうそう」

石井「そうそう」

藤「エネルギーソースもマイナスらしいので」

石井「そうです」

水島「なるほどね」

石井「さっき、お二人の先生がおっしゃった密度の問題ですねぇ」

水島「まぁ、その辺は大体、そういう人が大多数だったっていうことが多いので」

石井「ただ、未だ捨てる必要はないかもしれないけれども、そろそろ１千億、超えちゃったら、もう考えなくちゃいけないなと」

水島「まぁ、そうですね」

藤「まぁ、石油特会だから、そうかぁ」

水島「そうですね」

藤「毎年５０億で２０年やれば超えているねぇ」

石井「青山さんを…」

水島「まぁ、でも、それは、あまり良くないよね。ある程度、決めなきゃいけないよね」

石井「そうですね」

藤「でも、やっぱり、どうしてもメディアの方も受けて夢のエネルギーって」

水島「あぁ～」

藤「必ず担当が変わって来ると、みんな、来るんですよ、大体」

石井「原子力も夢のエネルギーって言われたんで」

水島「(笑)」

藤「まぁ夢は夢のままにしておいて下さいって言うと、何かしらけちゃうんですけどね」

水島「解りました。でも、そういう現実の問題、今、出来ることをね、１０年、２０年の中で出来ることは、我々考えざるを得ないから、調査とかね、そういうのがあるかも分かんないけどね。どうですか、石井さんは」

石井「ちょっと暗い話が並んじゃったので、前向きの話をいくつかしようと思います」

水島「まぁ、どちらでもいいですけど」

石井「(笑)」

水島「何でもいいです。前向きの方がいいですけどね」

石井「手短に言うと、この前、首脳会談でも出て来たんですけども、あまり筋が良くないですけれども、植物性エタノールという話がありまして、コーンからエタノールを造って、混合燃料にするっていう話があるんです」

水島「ほぉ、トウモロコシから」

石井「はい。実は１５年前に日本で大失敗しちゃったんですけど。はっきり言って、国産だったら無理です。ただアメリカっていうのはそれに補助金を投入して、ようやくＷＴＩの試算で８０から９０だったら、ガソリンと混合燃料でやったら大丈夫だとし、また混合率が７から８だったら、エンジンを改造しなくていいと。それでブラジルは今、２０％のＥ１０というのを、E２０というのをやっていて、ブラジルもコーンを沢山、作っているから。トヨタは、それでブラジル向けに改造車を造っているんですね」

水島「うん」

石井「こういうことが並ぶと、もし、さっきアメリカからエネルギーを買うっていうのもあるんですけど、あまり筋が良くないので（笑)、杉山先生に怒られちゃいそうですけれども、もしかしたら…」

藤「植物性エタノールを入れた時に、日本でどうやって使うの」

石井「ガソリンに入れて…」

藤「もう絶対、保守的な元売りが受けると思う？」

石井「受けない。でも、ちょっと空気が変わっているんですよ。この前、え一と、第７次にも入りましたよ」

藤「だったら何故、原油を買わないの」

石井「あぁ、そう。僕もそう思うんですけど（笑)」

水島「いや、だから、そうなんだよ。あのう…」

石井「ただね、これは政治的に発展したんですよ。というのは、中西部って正に共和党の地域じゃないですか」

藤「あれ、農業票ですからね」

石井「そう。農業票じゃないですか」

水島「あぁ、じゃあ、農業の耕運業者と言うか農業者に…」

石井「ただアメリカって合理的で、５年で補助金って今、一巡しちゃうんですって」

水島「なるほど」

石井「切れ始めているんですけど。日本が買ってくれたらハッピーです、そこまで下手に出る必要は無いかもしれないけれど（笑)」

藤「だったら、絶対、原油、シェールオイル買った方がいいよ」

石井「その方が正しい形になるんですけど、共和党の人は喜ぶんじゃないか、お二人にお叱りをうけそうですけども（笑）」

水島「いやいや」

石井「喜ぶって話が一点」

水島「うん」

石井「あと、私は外交官と意見交換しました。某国会議員、和田政宗さん、僕をスパイって言っているんですけれども（笑）、それは冗談、トルコのスパイだそうですけど…」

一同「（笑）」

藤「あぁ、なるほど」

石井「僕は、これで、ただ、あのう…」

水島「和田さんが、そう言っている訳？」

石井「はい。外交官と飯を食っただけなので。トルコじゃないですよ。東欧の外交官と某アジアの外交官、ちょっと言えないですけど、飯を一回、奢って貰っただけなので、視聴者の方、許して下さい」

水島「（笑）」

石井「僕はスパイじゃないので、これくらいだったら許されると思うんですけども、安い飯なので（笑）」

一同「（笑）」

石井「話を戻すと、やっぱり日本に期待していまして、日本に原子力を作れる国は無いから、色々情報交換する中で、僕にも声がかかったと」

水島「うん」

石井「東欧の外交官が言っていたのは、日本の原子力は西側の原子力だから、ほんと大切にして下さいっていうことだし、アジアの外交官って、今、中国がね、あんなインフラ投資銀行を創ったのも原発を売りたいからだよって言っていて、ちょっと気にして下さいよっていうのと、日本の原子力というのは東南アジアに可能性があるので、是非、中国に勝って下さいとまで言われたんですね」

水島「うん、なるほどね」

石井「私達は日本を応援したいし、友好国だからと、ちゃんと言われて」

水島「現実的にね」

石井「うん」

水島「ちょっと、その１０年間、所謂、東日本震災のね、あの原発事故というところから

見て、実際、皆さんにも聞きたいけど、実力はどうですか」

石井「実力はですね…」

水島「つまり職員が半減しているとか」

石井「今、厳しくなっている事は確かですが、今、Point of No Return、最後の段階だと思いますよ。だから一個か二個、大きい前向きのプロジェクトやって、新型炉とかで注目を集めて、これ、夢みたいなことを言っているっていうことも分かっているんですけど（笑）、最後のチャンスが今じゃないかなって思っているところであります」

水島「なるほどねぇ」

石井「新型炉ですねぇ」

水島「う～ん」

石井「いや、夢だと思います、ちょっと厳しいと思うんですけれども、原子力については今、やらないと、今が最後のチャンスだと思います」

水島「ただ中国とかロシアっていうのは、ずっと造り続けているじゃないですか」

石井「はい。国内市場がしっかりあるから」

水島「あぁ」

石井「彼らは東欧市場があるからですね」

水島「そうだよね。ということは、我々の国は先細りしているじゃないですか」

石井「はい」

水島「自分でやめているっていうところがあるじゃないですか」

石井「はい。だから、せめて外国で一個、大きいプロジェクトが欲しいなぁっていう感じはしている」

水島「なるほどね」

石井「日本だけじゃなくってＧＥが日立と組んでいるし、重工はアストラムというフランスのメーカー、アストラムだったかな。ちょっと名前が変わっちゃったので忘れちゃったけど、旧アレバ、そういうところと国際的な売り込みで、未だ市場が広がる南米、東欧、ＥＵの東欧ですね」

水島「うん」

石井「あと中東ですね。トルコは事実上、取られちゃいましたけれども。そういう事で日本の外交っていうのは元々悪い事はしていないので、この８０年間、それを生かしながら各国毎の背景をやりながら、中国とロシアの原子力産業に勝つという期待を持っていると。期待し過ぎかもしれないですが、高市さんが異常に原子力好きですね（笑）」

水島「うん」

石井「次かもしれないんですけれども、あるパーティに行ったんですけれども、三菱重工の新型炉の名前まで、僕だって言えなかったんですけども、製品名まで言っていたので、異様に勉強しているんですよ」

藤「誰かレクチャーしているか知っている」

石井「あぁ、そうですか」

藤「（頷く）経産省のＯＢ」

石井「あぁ、そうですか」

藤「うん」

石井「あと、僕、京大の某先生とかも聞いたんですけれども、旦那様が大好きですね。あの山本さんが。もし高市さんになったら、もうテコ入れの期待が、夢みたいなことを言うかもしれないんですけど」

藤「でも、石井さん、その前に東京電力の抜本的な立て直しが先じゃない？」

石井「それも確かに（笑）」

藤「あれが出来ないと、だって東日本の原発の再稼働っていうことが出来ないじゃん」

石井「ただ、それは７です。柏崎刈羽７号を、うん」

藤「だって信じられないチョンボばかりやるということは、もうかつての東電じゃないんだもん」

水島「いや、だから、今、聞きたかったのは、そこのレベルをね」

石井「東電の方が５万人も居るんですけど、大卒が、この１０年で２千人、中途退社したという風に…」

水島「あぁ」

石井「２千人が中途退社したって言われているんです」

藤「まぁ、あれは逆に、一番、優秀な人から抜けていますからね」

水島「そうだよねぇ」

藤「うん」

石井「どうも韓国メーカーに行ったチームもあったっていうことを聞いてですねぇ」

水島「あぁ」

石井「結構、強いんですよ。ポダム重工っていうのがあって、そこに行ったＯＢ達が居るという話で…」

藤「だって３．１１以後って東京電力のお子さんって虐めに遭っていましたからね」

石井「そうですねぇ」

水島「そうだねぇ」

石井「言っちゃ悪いですけど東電の反原発デモを見たら、もう某朝鮮太鼓を叩いていたんですね。つまり在日の人達がお金を出しているのかなぁいうと疑惑があったっていう恐ろしい話ですけど。あと、辿ったら、そういう団体はありましたね。もしかしたらと思うんですけど、そこから先は辿れないんですが」

水島「東電の、あれ、何か株主構成っていうのはどうなっているんですか」

石井「今、ちょっと判らないですが、ただ…」

藤「３割、外国人が持っているでしょ」

石井「いや、ただ４割、５割か…」

藤「そんなに持っている？」

石井「５割は東電、あぁ、国じゃないですか」

藤「あぁ。あれには、所謂、破綻みたいにしたからね」

水島「４割は国が、政府が持っているんです」

藤「そうですね」

水島「さっき言った３割ぐらいが外国」

藤「あぁ、それから民間が持っている人は３割ぐらいは持っているんじゃないですか」

水島「あぁ、なるほどね」

藤「今だって、全体でかなり外国人のシェアって高いですから」

石井「はい。前の島田事務次官は東電の取締役で再建計画を創った人ですけれど、それが全部、壊れているんですけど（苦笑）、だから東電には是非、頑張って欲しいと思いますけど、ちょっと僕も策が無いと言うか（笑）」

藤「いや、その人、だってラピダスに行ったからね」

石井「そうです。まず第７号機を動かして欲しいなぁって、経営を改善して欲しいなぁっていう感じはします」

藤「チョンボうってテロ施設がってやって４年先まで出来ませんって」

水島「素人で言うと、杉山さんに聞いた方がいいかも分からないけど、原子力規制委員会か結構、独立組織として言いたい放題やっているっていうね」

藤「うん」

石井「はい」

水島「任命とか、あれは、どうして、あんなに原発反対派ばかりが集まっているんだろうみたいな…」

石井「変わらない。人事的に、ちょっと変わったんですけど」

水島「はい」

石井「細かいことを言うと、地質学って独特の人達が居て、ちょっと変わった人が確かになっていると言われているんですね」

藤「あの島村さん始めね」

石井「そうです。元々反原発が強い不思議な組織、思想的に左の人」

水島「そうです。そういう傾向でしょ。私が解らないのは、一応、政府のあれでしょ」

石井「はい。だから結構、自民党が入って人事を変えたんですけれども、未だ残っているから…」

藤「でも、それって…」

水島「だから、今、クビには出来ないの」

石井「はい？クビには出来ないんですね」

水島「全員クビ」

石井「国会承認で…」

藤「デファクトが民主党政権の時に出来ちゃったんですよね」

水島「あぁ、そういうことか。あぁ、そうか、そうか」

藤「だから、その時に、当時、経産省に規制も推進も両方やっているって分離させられて…」

石井「分離させられて、一番、最初の時は、一度、政府の委員をやった人はなっちゃ駄目とかメチャクチャな規制とか、もう２分の一しかなかったんです」

藤「それで始まっちゃうと、そのデファクトがそれですので」

水島「じゃあ、スタートがそれだもんね」

藤「そう。だから少しは良くなっても、そういうのはずうっと残っていますよね」

石井「何とか、それを変えて欲しいなというのが、まず一点」

水島「それをやらないと、ほんとに中々動かないじゃないですか」

石井「国策がごちゃごちゃになっている訳です。今、再稼働しろって申請に行っても、経産省の答えは、規制委員会があるから、我々は関与できませんって本当にあちこちで言っているそうです。国会答弁でも言っているので」

藤「でも３．１１の時、そうなっちゃったからさぁ」

石井「そうです。やり過ぎたと思うんですけど、何とか変えて欲しいなっていうのが一点。あと、微かな希望ですけど、未だ日本が衰退したと言っても、充電インフラは強いで

す。僕の記憶だと、時価総額で三菱、川崎、住友、日立造船、三井Ｅ＆Ｓが世界の上位３０位に入っているんですよ。世界の場合はＧＥとか以外は建設業者なので、技術もって、こうやって土木が出来る充電っていうのは、インフラ企業って無いんですね」

水島「まぁ、そんな感じだよね」

石井「日本は未だ強いです。日立、東芝も電気に株で分類されるんですけど、それなりに持っているし、この力っていうのは、やっぱり海外とか、正にアメリカとのカードにもなると思います。さっき、おっしゃったように、アメリカのインフラ投資というのをちょっと希望として残っているのかなぁという感じはします」

水島「う～ん、それが段々海外に虫食い状態にされてね」

石井「はい」

水島「腑抜けになって行くってねぇ」

石井「ただ、海外でのビジネスをやって、国内でも豊かになる。インフラを造り直しっていう話が竹村先生から出ましたけども…」

水島「なるほどね。はい」

石井「その未だ残っている産業の力はあるのかなぁっていう感じはして…」

藤「だけど、くどい様だけど、それは、やっぱり東京電力ですよ。一番の問題は、福島第一の廃炉の作業が物凄く遅れちゃっているから…」

石井「そうですね」

藤「やっぱり、あれが進まない限りは、いくら規制委員会を緩めるって言ったって…」

石井「あぁ」

水島「そう」

藤「国民感情が変わらないですから」

石井「僕も、そう思ったことがあります。正に…」

水島「あれは何の原因ですか。技術的な…」

藤「まぁ、だから、そもそも難しいっていうことがあるんですけど、やっぱり人材不足ですよ」

石井「人材不足もあるし、ちょっと過剰規制もあるんじゃないかな、僕は過剰放射性規制っていうのをずっと考えているところですね」

藤「うん。それもあるけど、いや、もっと外から、例えば国も含めて本当に優秀な人材を投入しないと、今、東京電力だけの人材だけでやっていたって、多分、もう無理ですよ」

一同「うん」

石井「なるほど」

水島「だからさぁ、まぁね、半分、あれだったけど、本気じゃなかったけど、あれねぇ、燃料棒が落ちたら、特攻隊、行くぞって言って本当に東電に申し出たことあったんだ」

石井「あぁ、そうなんですか（笑）」

水島「１２人で」

石井「あぁ、凄いなぁ（笑）」

水島「６５歳以上で、私と一緒に原子炉に行ってくれる人、居ないかって言ったら１１人が居ました」

石井「有難うございます」

藤「あの災害の時の事故ですか」

水島「あの時」

藤「あぁ、そうですね。うん」

水島「う～ん、本当にねぇ、どうしても、みんな死んじゃうかも分かんないっていうことがあったから…」

藤「うん、そうですねぇ」

水島「それだったらというねぇ」

石井「有難うございます」

水島「まぁ、どうせ、断られるとは思ったけどね（笑）、でも１１人ぐらい居たっていうのは本当に嬉しかったですよ」

一同「うん」

水島「う～ん、だから本気を見せないとね」

一同「う～ん」

水島「どうもねぇ、東電っていうのは、のんびりしているっていうか何か」

藤「だから経産省の問題ですけど、結局、東京電力のせいにしちゃっているから」

水島「あぁ。そうか、両方共ね。役所が東電のせいにしちゃっているんだ」

藤「うん。だから、まぁ、みんなで批判されたくないですから」

水島「あぁ」

藤「だから、その東京電力が、かつての東京電力だったら人材も豊富でしたけど、今は、かつての東電じゃないのに、物凄く重い十字架を二つも三つも抱えちゃっているので、この構図が結構、きついですねぇ」

水島「なるほどね。川口さぁん」

川口「はい」

水島「川口さん、日本の原子力発電の問題についても色々お書きになったりしているし、ドイツの原子力事情も書いているんだけど、今、ずっと、その話をしているんですけど、どうですか」

川口「はい。え一と、最後に明るい話題をというリクエストだったので…」

水島「(笑)」

川口「私も竹村先生のダム嵩上げに負けないぐらい、明るい話で終わりたいと思います」

水島「おぉ、そういう話ですか、はい。いいねぇ（笑)」

川口「そのエネルギーに関して、日本はやろうと思えばドイツに比べると、ずっと出来ると思うんですね。それで景気をちゃんと取り戻すって言うんですか。それは出来ると思うので、まず、やらなきゃいけないのは原子力発電所を再稼働する。どんどん再稼働をすると。

それで、それをやって動かしながら安全対策は更に進めて行けばいいだけの話で、ずぅっと待っていて、これで１００％なんて言ったら、また間違いになると思うんですね。だから事故が起こらないようにということを心にしながら、それで、どんどん再稼働すると。それで、もう一つは核燃料サイクルですね。これも六ケ所村で、ずぅ～っとやっていますけれど…」

水島「そうですねぇ」

川口「これを、いつ完成って言って、また延ばしてってやっているんですけれど、もう、そろそろ完成間近ですから、それが始まると」

水島「うん」

川口「そうしたら、日本は今迄、全然、エネルギーが無いって言われていましたけど、これで…」

水島「半永久的というかね…」

川口「まぁ、半永久的とまでは言わないけれど、でも、かなり安全になると。もう一つは、再エネですね。再エネの買い取りをやめると。だから再エネを自力でやって貰うと。そうしたら多分、採算のとれるところでしか、みんな、やらないと思うから、釧路湿原とかには誰も造らないと思うんですね」

水島「そりゃ、そうですよ」

川口「だから買い取りはやめて、そして、そうやっていくと、多分、再エネと、それから他の火力だとか原子力なんかのバランスが一番、いいところに最終的には落ち着いていくと思いますから、それが大事だと思う」

水島「うん」

川口「ドイツが出来ないっていうのは、もう今度の政権が、もし替わって、また原発再開とかってなったり、あと火力も今、止めていますけれど、それが、また動かされたりする

のが嫌だぁと思っている緑の党とか今の社民党の政権が、原発で留めたところの冷却塔を爆破したり火力発電の排気塔を爆破したりとかしている所もあって、もう絶対に金輪際、動かしたくないという気持ちが顕わですよね。

だから、そういう国っていうのは、そういうことを支持している国民も多い訳だから中々難しいと思うんですけれど、日本の場合はそうじゃないと思うし、今の政治家だったら、ちょっと無理かと思うところもありますけど、その内、何処かに潜んでいるトランプ大統領みたいな勇気があって本当のことをちゃんと言ってくれる政治家が、何処かに隠れていて出て来てくれるのを、私は待っています。

それから、ちょっと宣伝になってしまって申し訳ないですけど、水島さんの座っていらっしゃる一番左手の本ですけれど、今度、１８日に発売で、未だ出ていないんですけれど、この『原子力はいる？いらない？』っていう本は、フランスの山口昌子さんとの対談本なんですね」

水島「うん」

川口「フランスはご存じの通り原発大国で、それでドイツは、もう原発大嫌いの国ですけれど、ここで面白かったことを、ちょっとお話ししたいんですけれど、フランスが何故、ここまで原発を進めるようになったかと言うと、もう、これはフランス人の考え方を非常に象徴していると思うんですけれど、まず国の独立」

水島「うん」

川口「何を決めるにも絶対に何処の国にも頼らないで独立するということが、一番の最重要なポイントだそうですね。ですから原発に関しても、絶対に独立を損ねない為にもエネルギーとして原発が必要だっていうことでやり始めた。そこのところは非常にちゃんと国民にも説明をして、国民も納得しているから、これは与党でも野党でも一致した話だから、激しい反対運動は起こらないという風に山口さんがおっしゃっていたのが凄く印象的だったんです。

それでね、日本ですけれど、日本っていうのは、太平洋戦争が始まった理由っていうのは、やはりエネルギーを断たれてしまってエネルギーが無くなって、それで戦争が始まったっていうのは、皆さん、解っていらっしゃると思うんですけれど、ただ、日本が戦後、原子力長期計画、第一回の長期計画を立てたのって、いつだかご存じですか。

これは、山口さんから伺った説明じゃないんですけれど、これを聞いて凄くびっくりした訳ですけれど、たった戦後１１年しか経っていない１９５６年に、もう第一回の原子力長期計画っていうのを立てたっていうんですね。でも原爆を落とされて１１年目って、未だ悲惨な衝撃っていうものが未だ冷めやらぬ時期ですよね」

水島「うん」

川口「だけど物凄く前向きに、あそこまでエネルギーが大切だっていうことが骨身に沁みていたからこそ、その当時の政治家っていうのは、それを第一の目標として原子力の計画を立てたんですよね。それも原子力発電所を建てるっていうことに関連して、ウランの濃縮を自分達でやろうと」

水島「うん」

川口「だから核燃料を自分達でつくれるようにしよう。そして使ったあとの未だ残っている燃料、ウランを集める再処理ですよね。再処理をしようと。最終的には、それを燃やしたら、もっと増えるという高速増殖炉っていう、これは、ちょっと今、日本は駄目になっていますけれど、その３本の柱で当時１９５６年に計画を立てたっていうのね。だから、当時の政治家っていうのは物凄く意識が高かったなぁと思うんですよ」

水島「うん」

川口「本当に、こういうことを考えて、さっきの平井さんのお話しじゃないですけれど、そのあとの何十年あとのことを考えた計画だったと思うんですよね。そのお陰で３０年後に凄く経済発展したじゃないですか」

水島「うん」

川口「だから、そのあと段々駄目になっちゃって、アメリカにいちゃもん付けられたりしたのも色々あると思うんですけれど、どんどん駄目になって、今、駄目なままで何十年も来ちゃっているんですけど、私はそういう政治家が居たということ、そしてエネルギーっていうのは、いかに大切かっていうことを、もう一度、ちゃんと私達、国民に認識させてくれるような、そういう政治家が出て来れば、日本っていうのは他の条件は揃っているじゃないですか」

水島「うん」

川口「だから、それを待ちましょうって言ったら何かねぇ、果報は寝て待てみたいになっちゃうんですけれど、そうじゃなくて、それをどうにかして、私達の言論の力で、他には何も出来ませんので、それで広めていくべきだなぁという風に思っています」

水島「はい」

川口「国防とエネルギー、これは、二つが、もう安全保障の鍵って言うか、もう二本柱だと思っているんですね。今、国防のことばっかり、なんやかんや言っていますけど、やっぱりエネルギーの独立を達成するには、エネルギーと国防、独立、そういうフランスに学ぶところが非常にありますので、この私の次の本も、どうぞ宜しくお願い致します（笑）」

水島「はい。ほんとにねぇ、今言ってくれたようにフランスの独立っていうのは、参考になるっていうのと同時に、特徴的なのはヨーロッパの中で食糧とエネルギーを、少なくとも自前でやっている。農業国でもあるし工業もやっているけど、電力は自分で原発をやっているっていう珍しい国ですよ。他の国はドイツも含めて違うんだけどもね。というようなことをやると、やっぱり我々の国の在り方を、もう一回、本当に、きちっとやらなきゃ、それ、エネルギーがベースになるっていうねぇ、どういう形で、我々のエネルギーをつくり出すか、安定的に供給できるか、やっぱり電気料が高いのは駄目ですよ。どこもやれない、企業もやれないもんね。ということをベースにしなきゃいけないと思いますけども、青山さんの方から、ちょっとメタンハイドレートについて、やっぱり色々来ましたので、ご紹介しますね。

公平を期す為にブログを紹介して下さいっていうのがあったので、はい。２０２３年６月３０日のブログですけど、これを、そのまま読むけどね。はい。『アメリカのシェールガス、シェールオイルは実用化に到達するまでに、およそ１００年を要しました。メタンハイドレートをはじめ日本の海洋資源の研究開発は始まって未だ１８年ほどです。新資源の

開発には、ありとあらゆる努力が長期にわたって必要ですが、もっとも大切なもののひとつは耐えること、焦らないことです』と。まぁ、こういう意見が寄せられました」

井上「それは青山さんからじゃないですよ。私が以前から言われている事を伝えて欲しいと」

水島「うん。これ、青山さんのブログじゃないの」

井上「青山さんのブログです。青山さんから来たんじゃないです」

水島「あぁ、そうか、そうか。はい。こういうのがありますよということで、ご紹介したっていうことですね」

石井「それも正しいと思いますけどね」

水島「一番の問題は、その正味の問題と、ここ１０年、２０年のところと、長期的な、こういう、さっき竹村さんがおっしゃったように５０年後のことを考えるっていうことでね、エネルギーがあるっていうことを考えた時、原発の問題とか直ぐに解決しなきゃいけないじゃないのという気がするんですけどね」

石井「因みに原子力の予算をつけたのは、ご存じかもしれないですけど中曾根康弘さんですね」

水島「うん」

石井「しかも、当時、それを認めたのが当時、池田総理と松永安左エ門ですよ。当時８０歳ですよ。確か昭和３０年代」

水島「うん」

石井「原子力の予算を取りなさいっていうのと、あと電中研の中で、人を出して留学させたりしたんですね」

水島「うん」

石井「自分の作ったシンクタンクで。正に８０歳のお爺さんが５０年先の夢を語っていたので」

水島「それは何年頃、中曽根時代？」

石井「いや、あのう、昭和…」

藤「中曽根が科学技術庁の長官の時」

石井「科学技術庁の長官の時、４０前後の時に中曽根さんは主計大尉で、さっき海で泳いだんで、確か…」

水島「主計少尉だったか中尉だったかだよね」

石井「大尉で、最後、少佐だったんですけども、松永安左エ門は引退してシンクタンクを創って、そこで電中研から、あぁ、ごめんなさい、繰り返しになって、人を出すとか、あと池田総理と直談判して、これ、やっておきなさいよと、ちゃんと言ったんですね」

藤「だから、もっと言っちゃうと、日本の一番最初の、原子力発電所は高温ガス炉という、軽水炉じゃないんですよ」

水島「うん」

藤「高温ガス炉って、どういうのかって言うと、兵器用のプルトニウムをつくる為の原子炉なんですよ」

水島「うん」

石井「もしかしたら、あったかもしれないですね」

藤「いや、だから、そうなんですよ」

石井「いやぁ～」

水島「いや、だからねぇ…」

藤「高温ガス炉はそうでしたから」

石井「あぁ、それはそうですけど」

藤「だから今の軽水炉のプルトニウムだと原子爆弾の材料にならないので、だから高温ガス炉だけは北朝鮮の黒鉛炉と同じで、本当に良質な兵器用のプルトニウムにも出来るっていうことで、少なくとも岸さんとか佐藤栄作さんが科学技術庁の長官の時には、原爆をつくる為に、実は大臣をやるとかっていう経緯もありますから」

水島「佐藤栄作は言っているもんね」

藤「はい」

水島「あれを引っ込める代わりに、ノーベル賞を貰ったって」

石井「あ、そうですか」

藤「うん、だから引っ込める代わりに、平和賞とか宇宙利用とかっていう話ですから」

水島「うん、そうそう。沖縄のあれも返してやるからっていう、割と真面に核武装を言ったのは佐藤栄作ですよ」

藤「いや、だから隔世の感がありますけど、１９５０年代までは、そういう雰囲気が日本にあったので」

水島「あぁ、それとねぇ、私は小さい頃、かなり年上なので昔だけど、戦後の小学校、昭和だから、１～２年か３年ぐらいかなぁ、図書館の子供用の科学本。偕成社か雄弁会、講談社という出版社の、科学本の子供用の解説本には原子力の平和利用っていうのが凄くあった」

石井「あぁ」

水島「ジャガイモをこうやってアイソトープを与えると何だかとかね、だから、全く原子力は、原爆を落とされたから、もう、そんな、あれなんていうのは全く無かったですよ。少なくとも、あの昭和３０、３１年から３５年ぐらいの間の出版界は、そういうのが無か

った。平和利用しよう」

藤「１９７０年ぐらいから、おかしくなりましたよね」

石井「１９７０年、政治的なイッシューになっちゃったので、それは残念ですね」

水島「そうですね」

藤「戦前派が居なくなったっていうのが大きいですよ」

石井「それもあるかもしれない」

水島「結局、そっちへ持って行っちゃったんだねぇ、結局ね」

石井「社会党も一生懸命、賛成していましたから」

水島「あぁ、そうですねぇ。いや、それは、もう、だってねぇ…」

藤「隔世の感がありますよ」

水島「前に言いますと、皆さん、信じられないですけどね、私が１８歳で東京へ出て来た時、電柱に張り紙があったんですよ。『正義と愛国の党』、何処だと思います？日本共産党って書いてあったんですよ（笑）」

一同「(笑)」

水島「いや、私は右翼の党かと思ったら、正義と愛国の党、日本共産党」

石井「愛国がねぇ」

水島「北方領土、全部、返せっていうねぇ。いや、看板が。いや、そういう時代でね」

石井「う～ん」

水島「ひぇ～～っと思ったんだけどね。そういう時代もある訳で」

藤「これは隔世の感がありますねぇ」

水島「はい。最後に皆さんから一言ずつ戴いて終わりたいと思います。じゃあ、一言で」

竹村「はい。今日、水力の大きなプロジェクトの話をしましたけど、実は小水力で全国各地の僕達の仲間が苦労しているんです。つまり送電線が無いとか、もういっぱいだとか。やるには何億の送電線の金を出せということで、非常に辛い思いをしているんです。こういう手があるんです。だから別に、それは、もういいよと。水が電気分解して水素、酸素になりますので、その電気分解の電気が無い訳ですよ。それを水力でやればいい訳です。

ですから水力で電気分解の既存のプラントがもう出来ていますので、だから、簡単に水素はありとあらゆる所で出来るんです。実は、日本列島中が水素の山な訳です。だから、この水素はちょっと期待が薄いって言うなら、じゃあＣＯ２を持って来てメタンを作っちゃえと。要は日本列島そのものがエネルギー列島だと、私は思いますけどね。

ですから今、小水力で苦労している僕の仲間達は、電気に売ること以外にも手はあるぞということで、小水力、頑張れということを言いたいですね」

水島「はい。有難うございます。では、藤さん」

藤「はい。最後ですけど、次の参議院選挙に向けて、やっぱり国民の懐云々っていう話があって、再エネ賦課金の廃止って、国民民主党も何か去年あたり言っていたらしいですけど、とにかく今度の選挙は多分、再エネ賦課金の廃止っていうのを、連合体を創って貰って今、２兆とか３兆で物凄く大きい訳ですから、多分、そういう運動を、是非、杉山さんにやって戴ければなと思って…」

一同「(笑)」

藤「終わりにしたいと思います（笑)」

水島「さっき、川口さんから出ましたけど、あれはおかしいよね。あれをやめたら採算が合わないから、本当に真面にやる奴が居なくなるんじゃないの。いいアイデアですね」

藤「はい。杉山さん、よろしくお願いします」

水島「はい。平井さん、お願いします」

平井「ですから今のお話ですけど、再エネ賦課金廃止と言ったのは、日本保守党もある訳ですよね。それは、そういう連合体を創っていけばいいと思っているんです。それで、もう一つ、私がいつも思っているのは、今のフィット転がしっていう現象がある訳ですよ。

これはどういうことかって言うと、２０１４年だったかな、そこで制度が変わって、免許だけっていうかペーパーと土地だけを持っているところは３２円キロワットアワーで買うっていうのが、その権利として生きているんですよね。新規で参入すると１０円です。１０円ぐらいですよ。それをそこのフィット転がしっていうのは、３２円で権利を持っているところを買って、さや抜きをしようとしている」

水島「あぁ～なるほど」

平井「だから私は、さや抜きをやめさせる」

水島「うん」

平井「つまり、もう３２円なんか駄目と」

水島「うん」

平井「動き出した時のフィット価格じゃなきゃ駄目だという風に変えないと、この再エネ狂騒曲っていうのは止まないと思うんです」

水島「ほんとに止まないねぇ。あぁ、そういうのがあったんだ」

平井「えぇ」

水島「なるほどね」

平井「それはフィット転がしって地上げ屋さんみたいな人が沢山、群がって、中々泳ぎの良い人達が居て大変なんですけれども、こういう実態もあります」

水島「これは思い切ってやらないとねぇ」

平井「えぇ」

水島「うん。大分、違いますよね。そうしたらね」

平井「全然、違いますね。買い取り価格は三分の一ぐらいになると思いますね」

水島「あぁ、そうかぁ」

平井「ということは国民負担が三分の一になるっていうことです」

水島「そういう電気代の負担は、もう本当に勘弁して貰いたいっていうのがあるもんね」

藤「これは、やっぱり本当に、しっかり改めて欲しいですね」

水島「はい。杉山さん、お願いします」

杉山「トランプ政権がエネルギーに関して言っている事は物凄く真面で、実は日本こそ、そうやるべきだっていう話ばかりなので…」

水島「すっかり全部、貰ってもいいぐらいですね」

杉山「外圧が無いと変わらないっていう情けない話のあるところもあるので、これは一生懸命、アメリカとも色んなチャンネルで官だけに任せないで、民でも色んな所で対話してね、そういう中から真面なエネルギー政策の方にしようっていう、それに考えるいいきっかけを貰っていると思うんです」

水島「そうですね」

杉山「それを生かしたらいいと思いますね」

水島「今こそ親米国家になろうと（笑）」

一同「(笑)」

藤「全然、同盟関係じゃないですからね」

水島「そうですよ」

杉山「アメリカが真っ二つだから、どっちが親米で、どっちが反米なのか分からないですけど（笑）」

水島「うん、まぁ、分かんないからねぇ。今、政権を執っているのは、トランプってだけだから。はい。では、続いて石井さん」

石井「実は、日本が資源国っていうことで、もう全て関わって来て、この点の一つ一つは、もう数百人ずつ死んでいる訳ですね。つまり沈没船ですからね。海上交通線とエネルギーを守る為に、これだけの人が死んだという現実、また３６万人の海運の戦没者ですね。軍隊を含めてですね」

水島「うん」

石井「この現実を見て、それで今、考えないといけないんですけど、皆さん、８０年前の話を忘れていませんかということを改めて、繰り返されるんですけど、何故か政策の中心

にならないんですが、もう一回、８０年目に考えましょうということを言いたいと思います」

水島「うちの伯父さんは、それで死んでいますね」

石井「あぁ、そうですか」

水島「靖國に居ますけど」

石井「あぁ」

水島「レイテ沖のね」

石井「レイテなんですね」

水島「戦死ですけど。いや、でも海軍でしたからね。はい。そういう意味では、忘れちゃいけないですよね」

石井「うん」

水島「こういう…」

石井「今に教訓が見事に残っていますから」

水島「そうですねぇ」

石井「これを見るだけでも、ですね」

水島「はい。川口さん、お願いします」

川口「はい。何かこの１０年ぐらい、もうヨーロッパでは民主主義ばっかり言っていて、それで誰が民主主義を、これが民主主義だと決めるんだか解らないですけれど、今、ＥＵの欧州委員会も、それからドイツの政府も、気に入らない意見は全部、反民主主義だぁとか言って封鎖するっていうことが、ずっと続いているんですね。

ですから言論の自由が無くなっていると。ですから、この間、ヴァンス副大統領が（笑）ヨーロッパでは言論の自由が無くなっている、これが民主主義の基本だから、もうちょっと、ちゃんとやれと言っていたのは、本当にその通りだと私は思っています。それで封鎖されちゃっているのがＣＯ２ですよね。ＣＯ２は駄目だとか、原発は駄目だとか、まぁ、ドイツの場合ですけど、それから、あとロシアのガスは駄目だとかって、そんなことばかり言って、どんどん落ちぶれて来ている訳ですよね」

水島「うん」

川口「だから、そういうＥＵだとか、特にドイツですね。ドイツの何かそういう意見ばかり日本のメディアは、それが主流の意見であるみたいな顔して伝えてしまって、だから、日本では正確な意見と、正確っていうのは、私が決めることじゃないんですけど、片方の意見しか伝わっていないという状況ですので、もうちょっとメディアは両方の意見を伝えて欲しいっていうことと、それから、先程、話に出ていましたけれども、昔は原子力っていうのは希望に燃える産業だった訳ですよね。

考えてみたら、私は、子供の頃、鉄腕アトムとか、そういう漫画があって本当に２１世紀

というのは明るい時代になるんだなぁっていうような夢を持って育ちましたけれど、鉄腕アトム、あと妹がウランちゃんって言うんですよね」

水島「（笑）」

川口「あれ、ちょっと可愛い手塚治虫の漫画ですから第一級の漫画ですよ。リバイバルしないかなって今、チラッと思いました」

一同「（笑）」

川口「そんな感じです」

水島「なるほど。そう言えば可愛い妹はウランちゃんでしたね」

藤「ウランちゃんでしたねぇ」

水島「だから、あまり、今、そういう名前をつける奴は居ないでしょうね」

藤「今は無理でしょう」

水島「ねぇ（笑）」

川口「（笑）」

藤「もう絶対、無理でしょう、ウランちゃんなんて（笑）」

石井「ドラえもんの設定のですねぇ、原子力っていうのは消えたんですよ」

藤「あれ、原子力で動いているんでしょ」

石井「いや、２０１２年から設定が変わったそうですよ」

水島「あぁ、変わっちゃったのか」

石井「そう」

藤「前から原子力だと思ったけど」

石井「え？」

藤「前は原子力で」

石井「前は原子力だったけど、消えちゃったんですよ」

水島「これも酷いね」

石井「（笑）」

杉山「鉄腕アトムも変わっちゃったんですよ」

藤「えっ」

杉山「バイオ燃料で飛ぶんです」

石井「えっ、そうなんですか」

藤「今？」

石井「ほんと、それジョークじゃなくて？」

藤「じゃあ、アトムっていう名前じゃ駄目じゃないですか」

杉山「うん、アトムは無理…」

水島「変えなきゃ駄目じゃないですかねぇ」

藤「それねぇ、アトムじゃないでしょう（苦笑）」

石井「あぁ、それは知らなかったなぁ」

一同「（笑）」

水島「まぁ、こういうね、これが現実の日本でありまして。はい」

藤「言葉狩りですな」

水島「ただねぇ、やるべきことはある程度、皆さん、イメージが湧いたんじゃないかなぁと。再エネの賦課金とか色んなものを、具体的に直ぐ出来る、本当に決断すればやれることはあるし、原発の問題も事故がゼロなんていうことはあり得ないけども、最小限の防災、減災、こういうのを含めてインフラ整備っていうのを本当にやって行かなきゃいけないっていう気が致します。

今日は『トランプ革命とエネルギー大転換！日本は生き残れるか？』というテーマで、皆さんにお話し戴きました。有難うございました」

一同「（礼）」

＊＊＊＊＊＊　お　わ　り　＊＊＊＊＊＊